

常陸坊海尊 (三幕七場)

遠き国人のいふことの中にはおもしろきことぞまじれる

本居宜長

秋元松代

登場人物

おばば

雪乃

登仙坊玄卓（山伏）

先生

寿屋

安田啓太（その少年時代）

伊藤豊（その少年時代）

秀光

役場

親方

あっぱ

だんな

第一の海尊

第二の海尊
第三の海尊
虎御前
少将
若い男1
若い男2
男1
男2
巫女の少女
女ガイド
観光客たち
少年 正男
少年 勇一

第一幕

(その一)

まっ暗な山の中。

十月の夜。

杉の深い木立が背後にそそり立って、昇りかけた月の光をさえぎっている。

谷川の水音と風の音が聞える。

……

遠くから人の呼び声がある。山に反響してよく聞きとれないが、誰かを探している呼び声である。

……

草むらのかげから黒い小さな影が二つ動く。じっと背をちぢめている小動物のようである。

……

二人連れらしい呼び声が近づく。

やすだあ——、いとおお——。

……

叢の蔭から、黒い小さな影が、杉木立の中へ駆けこむ。また一人、あとを追って闇に消える。

……

懐中電燈と提灯を持った二人連れ。戦闘帽にゲートル巻きの先生と着物の裾をからげた寿屋の主人がくる。

先生 伊藤お——、安田あ——。

寿屋 叱すからねえがら、おるなら出てこおい！——出てこおい！

先生 伊藤お！——、安田あ！——。

寿屋 ——どごさ行ったすかなア。

先生 実際、仕様がないなア。まったく世話がやけてかなわんですよ。

寿屋 先生もラクでねえすな。

先生 ラクじゃないですよ。僕だって、東京に妻子を残して来ているんだからね。家族の安否も気がかりだし、ここ一カ月あまり、東京からの連絡はぶつつり切れて、あっ！（靴の紐が切れる）——ことぶきさん。灯りを見せて下さい。

寿屋 どうすなすつたす。

先生 靴の紐がないという時勢ですからね。（なおし始める）

寿屋 まったくす。けど先生。よっぽどはア、東京はひでえことやられとるようすな。

先生 らしいね。一度みに行きたいとは思うけど——東北本線は乗れるとききましたかね。

寿屋 さあどうだべか——。

先生 僕が、ついかつとして殴ったもんだから——安田という子供はどうしてああ、度々おねしよをするのかなア。五年生にもなつて。

寿屋 わらしのうちは、すかたねえす。

先生 伊藤まで一緒にこういう面倒を起こすんだから、実際——。どうもありがとう。

寿屋 なら出かけるすか。

先生 (うんざりして) このさきはどこになるんです。僕は心臓弁膜症があるんでねえ、急な山道は体によくありませんよ。

寿屋 こつから先きはへえ、大したこたアねえすよ、三里ぐれえで奥沢ちゅう部落へ出るす。

先生 三里——。子供の足でそんなところまで行つたと思えないなア。これだけ探しても見つからないんだから、山へ逃げこんだんじゃないかも知れない。

寿屋 けど先生。わすらにや責任あるすよ。わすも疎開つ子をば預つたことぶき屋の主人がす。探すだけやへえ、探さにやならねえす。

先生 (勇気を起こして) それはそうだ。その通りだ。いまの日本にとって、子供は人的資源ですからねえ。この苦しみも国家のためと思えば——。

寿屋 豊さんよう! ——、啓太さんよう——。(去る)

先生 伊藤お! ——、安田あ! ——。(去る)

.....

木立の闇から、這うように小さな影が出てくる。先生たちの去った反対の方へ逃げ出すつもりらし

い。

豊 (そつと) 安田君! はやく!

黒い影がもう一人、這い出してくる。

啓太 (泣声で) 伊藤君。ぼく、腹がいたい——。

豊 よせよう! ばか!

啓太 ぼく、東京へかえりたい——お母さま——。

豊 ばか。よせたら——。

二人、しゃがんだまま、途方にくれている。啓太、しくしく泣く。どこから走ってきたのか、雪乃、十歳くらいにも見え、十四、五歳かとも思われる少女。ひらつと二人のそばへくる。

雪乃 こおれ——お前ら疎開もんじゃろ。

二人 (おどろいてみつめる)

雪乃 迷い子さ、なったんじゃな。腹をばすかすとするんじゃろ。(笑う) ならば、海尊さまを呼んだらええ。さあ、呼んでみれ! 呼んでみれば。かいそんさまあ! と言うんじゃ。

二人 ——かいそんさまあ!

雪乃 (笑う) よす。それでよす。ならばおらが、にぎりめすをば持つてきてやるけえ、待つてろや。そのくらがりさ、へえつて待つんじゃ。

二人、あとずさりしながら木立の闇に入る。

雪乃 ふん! おとなすく待つとれや——。(走り去る)

谷川のひびき。月が昇ってくる。

ほう！ ほう！ とふくろうが啼く。

その声に合わせて、いたこのおばばがくる。

おばば ほう！ ほう！ ほう！ ほう！ ほう！ ほう！ ほう！ ほう！ やあれ、どこぞで誰

かが、海尊さまのお名をば呼ばったようじゃったが——わすの空耳かのう。ふくろうめが呼ばったのかも知れん。あの通り海尊さまのお月さんがのぼりよる晩じゃけえ、鳥けものにする

てからが、海尊さまをば懐すむが当然じゃ。ほう、昇りよる、昇りよる。——海尊さまが初

めてわすの前へ現れなされた晩と同じじゃ。——「さても武蔵坊弁慶がその日の装束は、黒

かわおどす

革絨のよろいに黄なる蝶を二つ三つ打ちつけたるを著て、大薙刀の真ん中にぎり、片岡の八

郎、鈴木わすおの兄弟、鷲尾ましおの三郎、増尾ましおの十郎、伊勢ほうがんの三郎、備前の平四郎、以上の七騎を従え

たり。すかるに常陸坊海尊を初めとすて残り十一人の者ども、判官義経公を見限り奉りて、

登仙坊 (声を合わせる) 平泉の御館を見捨て、いづくともなく逃げ失せにけり、いづくともなく

逃げ失せにけり。」

くら闇から山伏、登仙坊、出てくる。

登仙坊 おばば。お久すう。すばらくおばばの声を聞かぎったのう。懐すいす。変りもなかじゃ

ったすか。

おばば (憎々しく) 聞かぎったのう、じゃって？ 懐すいもないもんじゃ。もうはやとうに来ね

ばならんものが、お久すうもないもんじゃ。鈍なことをば言いよる山伏なんど見たぐもねえ。

登仙坊 おばば。会う早々から挨拶じゃのう。お山へおこもりばしておる時に、風邪ばひきよつて（咳）それでつい遅うなつたす。機嫌なおしてけれ。

おばば 風邪ひいたと？ ふん！ 信心が足らん証拠す。修業のなまくらな証拠す。それでま、えぐもえぐも、海尊さまのお弟子筋のような顔が出来るもんじゃのう。

登仙坊 あんたにはかなわんわ。これでもわすは夜道をかけて来たのす。ちいっとは優しうしてくれるもんじゃがなあ。

おばば 土産ば出しなされ。土産は何と何がや。ううん？

登仙坊 ま、ま、家へ行つてがらでよかろうに。あんたの好きそうなもんは買いたす、銭んこは足らんすなあ。それでもわすの真心は汲んでもれえてえす。

おばば まごころじゃ？ わすはそんなもんはいらん。銭んこ持っていねば泊めてはやらんど。

登仙坊 ま、ま、わけをば聞いてけれや。近頃のように戦争がひどうになると、わすのような山

伏修験道は、まるでお布施ががた落ちでう。米は配給じゃす、麦は統制じゃす、行くさき、行くさき、芋ばし食うておる始末じゃつた。

おばば なるほど言われてみりや、あんたの顔は芋にえつぐ似てきたす。見たくもねえ！ そんな精の抜けた芋づらで、えぐもえぐもわすの前へ出られたもんよのう。

登仙坊 おばば。そら愛想づかすというもんじゃ。わすらの仲はそんなものではなかがつたでや。おばば ふん！ 町さ降りて、銭んこばためたら戻つてきなされ。すたら考えなおさんでもねえす。ほう！ せつかくのお月さんが曇りよるわ。芋くせえ山伏の現われたせいじゃ。いまい

ますい！（去って行く）

登仙坊 おぼば——（泣き声で）おぼばよう。そらア、あんまり薄情な仕打ちでねえすか！ 情けねえ。どうすたらええべ。（切株へこしをおろす）海尊さま！ どうすたもんでがんしよう。わずに智慧をば授けてもれえてえす。

木立の闇でがさがさと動く気配。登仙坊ききつけて耳をすます。

登仙坊 これっ！ 誰じゃ！

少年たちのわっと叫びながら逃げ出す物音。登仙坊、とびかかって、両手で少年たちの首筋をつかんで引き出してくる。

登仙坊 こおれ。お前らはどこのわらしじや。いたずらもんめが！ この夜の山中をなんでもうろ

うろしとるんじや。顔をばみせい。（交る交るのぞいて）ふうん。お前らは東京もんじやな。

山家のわらしではねえわ。ははあ、分つたど。いま通つてきた麓の温泉宿で、疎開っ子とやらが迷子になったと騒いでおつたが——まんず、お前らがそのわらしに相違ねえべ。こおれ、そうだべ。——うん！ こらア、ええことば考えついたらど！ お前らを宿さ送りとどけてやつがらな。けど、お礼ばもらうためではねえど。さ、行くべ。行くべ。

豊 いやだ！ かいそんさまを待ってるんだ。

啓太 かいそんさまあ！

登仙坊 なんじやと。お前らは海尊さまに会うたとか？

二人 （首を抑えつけられたまま、うなづく）

登仙坊 そらアどんなお人じゃった。さあ言え！

啓太 (苦しく) 女の子だ。

豊 (おなじく) きれいな女の子だ。

登仙坊 —— (笑う) そらア雪乃じゃ。お前ら雪乃を待っておったがや。(笑う) ならばのう、銭んこを持ってこいや。(二人の首を抑えたまま歩き出す) すたらいつでも会わるるど。さあ、さあ！ 確^すっかり歩くべっしや。

(暗転)

(その二)

山陰のおばばの家。

人里を離れたあばら家で、神棚が目立つほかは何もない。前庭に木の実をひろげたムシロ。柿や大根が干してある。

夕方近い赤い陽ざし。

軒先きに立っているおばば。

庭に、戦闘帽の工員らしい若い男が二人。それぞれ手籠に松茸を入れている。

おばば なんじゃってえ！ わすの占いが当らんじゃったと？ わすの占いのどこがどうだと言
うんじゃい！

若い男1 まるつきり当っておらんからよ。まちがいはっかかりじゃ。

若い男2 そだそだ。みいんなはずれとるわ。それでお布施をもらって行きよるのは、騙かたりと同じこったべ。そんなでもお前はいたこかい。

若い男1 そんなだとも。詐欺でねえか。詐欺だべ。銭んこやって損ばすた。

若い男2 返すてもらうべと思つてはあ、掛け合いに来たんじゃ。

おばば こおれ！ なんじゃ？ お布施ば出すたと？ お前さんらは銭んこせえ出せばええと思うとるのかい。占いというもんはのう、頼むほうも頼まれるほうも、心のまことが一つにならねば、神様はお下りなさらんのじゃ。当る占いがすてもれえてえならば、もう一度はあ、心を入れけて来なせえ。何んじゃ、工場をば休んでからに松茸さとり山さんえつて、そのついでに神様さ訪ねて来たんじゃろ。

若い男たち (籠をかくす)

おばば (笑う) そらアえぐねえ心だ。お前さんらの心次第で、わすのとごさ来れば浮世の苦労は忘れるす。つれえことや悲すいことがあつたら、海尊さまを願うんじゃ。すたらこの世は極楽になるすよ。じゃ、またそのうち会うべ。さいなら——。(籠を肩にして去る)

若い男1 なんと厚かますいばさんだべ。

若い男2 わざわざ寄り道すて損すたでねえか。

若い男1 けえるべ。

雪乃、木の実を拾い集めた袋を肩に戻つて来る。

男たち、好奇心をあらわにじろじろ見る。

若い男2 姉ちゃ。おめえいくつになった。お前のお父^どうはどこさおるんじゃ、うん？

若い男1 やめれって——あんなわらすつ子かまっても仕方ねえべ。

若い男2 この家は、男さいねえでもわらすは生れるんじゃ。不思議でねえか。

若い男1 そらきつと神様がおくだりなさるんだべさ。(男たち、笑いながら去る)

雪乃、まったく無関心に木の実をムシロにひろげる。

家のうしろを忍び足にまわって、豊、啓太、そつとのぞく。

豊 (そつと) かいそんさま！

啓太 (そつと) かいそんさま！

雪乃 ううん？ ——誰じゃ。どごさ隠れとるんじゃ。

少年たち顔を出す。

雪乃 ふふん！ このあいだの疎開っ子じゃな。よす！ こつちさ来てよす。

啓太 (首にさげたお守袋をはずす) これ、君にあげる。

雪乃 なんじゃ。(中をあけて紙幣をつまみ出す) わあっ！ 銭んこだ！ 十円だ！ おらにくれるんじゃな。

啓太 (うなづく)

雪乃 なら、あんたはここさおってええ。そつちのあんたは帰^{けえ}んな。

豊 ぼく、ここへ縫いこんであるんだ。(上着の裾を噛み切って引き裂く)

雪乃 早う出してみれ。

豊 (十円札をとり出す) ほら! 君にあげる。

雪乃 わあ! 両方とも十円だ! よおす! もう返さんど。この銭んこはもう、おらのもんじや。

禧太 ねえ! かいそんなさま——。

雪乃 わすはかいそんなさまと違うでや。海尊さまはな、あの戸棚の中に蔵ってあるんじや。——
あんたら、見たいのがや。

二人 (うなづく)

借乃 なら、見してやるべっしや。けど、おばばには内証なのやど。あんたらにだけ見せっから、
誰にも言うなや。こっちさ来^こう。

雪乃と少年たち、家の中へあがる。

雪乃 そごさ坐つとれ。

雪乃、押入れから三尺四方ぐらいの黒びかりのする古い木箱を引き出す。

雪乃 秘密なのやど。そおつと見るべっしや。すいーっ! (蓋をとる)

箱の中には、枯木色の猿のようなミイラが坐っている。金欄色の帽子と袈裟をかけている。少年だ
ち不思議そうにのぞく。

雪乃 なあ。分ったがや。これが海尊さまじゃ。——よつく見れ。海尊さまのミイラじゃ。

直E ……………。

啓太 ……………。

雪乃 (蓋をとじて) あんまり長く見してはやらんど。

二人 (顔を見合わせる) ——。

遠くで、雪乃——とおぼばの声がする。

雪乃 あっ！ おぼばが帰ってくる。早う蔵うんじゃ。(箱を戸棚に押しこむ) ——早うごごさ隠れろ！ はよう！——はよう！

雪乃と少年たち、押入れに隠れる。

……カラスが啼く。

おぼば、松茸を採った籠をさげてくる。

おぼば 雪乃——まだ雪乃は戻らんと見ゆるわ。なにをしとるがや。

登仙坊、大きな背負籠に薪を入れてくる。

登仙坊 なあ！ おぼば。わすがこの通り頼むけえ、むごいことを言うもんではねえでよう。あんたにそんなこと言われては、わすはつらいでよう。なあ！

おぼば まんだあんたという人は、ぐだぐだどものば言いよるのがや。なんと思い切りのわりい

おとし男衆かのう。ならもう一度言うてきかそうかえ。あんたはのう、働きのねえ山伏で、わすの

とごさ転がり込んで来てからに、わすの物をば、ばアくばアくと大口ひろげて食うとるのす。

登仙坊 そらもうえつぐ分つとるわ。まこと相済まんと思うとるが、これから冬に向うて旅へ出るというは死ねということじゃ。——なあ。あんたのそばを離れとうもないわけは、あんたもえつぐ知っておろうが。わすはのう、あんたの肌をば忘れられんのじゃ。

おばば (せせら笑う)

登仙坊 この通りじゃ。春になれば旅へ出て働くすけえ、冬のあいだはここさおいてくれんかのう。

おばば だめじゃわ。あんたをば養うておつては、わすと雪乃が飢えて死にすよ。わすの血筋が

絶えてしもうたら、海尊さまに申すわけが立ち申さんでのう。わすは海尊さまの家内で、雪

乃は孫じゃ。なんとすても餓えて死ぬわけには行かんすけえ、どうでもあんたがごごさ、おりてえとなら、ミイラ行ぎょうについてもらうほかねえす。

登仙坊 ええっ！ ミイラ行につけじゃと？

おばば んだす。なにも愕くことはねえでや。海尊さまはのう、丁度、こういう時節にミイラ行につきなさったのじゃ。——あれはなあ、この東北一帯が、ひどおい凶作をば蒙った年じゃ

った。冬中はぬくぬくと温ぬくとつて、春からは急に寒うなった。五月になつても、まだ綿入

れをば着ておつたす。六月には霜がおり、みぞれが降つたぞえ。七月からは長雨じゃ。降つて降つて、天の底が抜けよつたかと思うたわ。六十六日があいだ降り続けてのう、米麦はおろか、ヒエもアワも立ちぐされじゃ。百姓は娘をば色街へ売つて、ようやつと食いつないだ。

その時よ、海尊さまの言わすにはのう、「わすは衆生済度のため、ミイラにならねばなり申さん、えつく見守つてくれい」と言わすてのう。足をばこう組んで、ずいっと西の方をば眺めたまま、念仏を唱えなされて、水一滴も口にはせられず、八十八日目にミイラとなられ申すたのじゃ。(合掌) ——さあ。あんたも今こそ覚悟をばかためる時でないがえ。

登仙坊 お、おばば——そ、そらあんまりというもんす。

おばば ミイラ行はのう、なんも苦くしいことはねえのす。ものを食わねばええのじゃ。わすが手
伝うてやるすけえ、今から始めろや。

登仙坊 いまからじゃと？

おばば 今が丁度ええな。春先きや夏場はへえ、腐れがきよって、からからに乾かんでのう、仕
上がりがえぐねえのす。秋は天氣がええす、水気がねえがら、乾きが早うてきれいに出来も
うすな。

登仙坊 や、やめてけれ！ やめてけれ！ ミイラになるよりや、旅に出た方がますじゃわい。

万が一にも命が助かるかも知れん。わすは出で行ぐでえ。——まこと、出で行ぐじゃ。(行

きかけて)——おばば。わすがおらんで寂すうねえすか。あんた冬中、一人寝せんならんでえ。

おばば ——んだな。あんたのようなもんでもおらねば肌さみすいべ。

登仙坊 北風に雪が乗ってくるでや。ひゅうひゅう！ と、ほくろの吹きとぶような隙間風が吹
きこむでや。凍みて、凍みて、凍みとおって、まつ毛まで氷りつくじゃ。何んとすてひとり
身ですごさるるもんでねえすよ。

おばば さてのう、ここが分別というもんす。いやいや。やつぱ背に腹はけえられん。わすはひ

きとめねえす。出て行きなされ。——出て行きなされ！

登仙坊 ええい！ なさけ知らず！ なさけ知らず！

おばば (山伏の装束を丸めて投げ出す) ほおれ！

登仙坊（泣きながら）あんたはその手にかけて、何人の男をばミイラにすたんじゃ。おそろすい

女おなこじゃよう。けど、その白いぬくてえ肌の、手ぎわりのえがったこと——。ああ！ わすは

いつそ恨めすいわい——。（泣き泣き去る）

おばば ふん！ やつと出て失せたわ。ええ気なもんじゃ、わすの肌が忘れられんと。（せせら笑う）——さてと、そろそろ夕めすの支度をせにゃならんが、雪乃はどごさ行つたんじゃろ。

脱ぎ捨ててある二足の運動靴をとりあげてみる。

おばば やあ。こりやおかすいど。——これ！ 誰か家の中に隠れておるんか！ ——こおれ！
いたずらもんはどこにおるんか！（押入れをあける）

雪乃と少年たち抱き合つたまま、あっ！ と叫ぶ。

おばば ほっ！ これはとんだ不義者をば見つけたもんよのう。おばばは見んごと出す抜かれ申すたわ。さあ！ そごから出てくるんじゃ。

雪乃と少年たち、おずおずと出てくる。

雪乃 おばば。かにしてけれ。

おばば 雪乃にはあとで仕置きをすつから黙つてろ。こおれ！ 疎開もん。お前らの名をばきこ
うかのう。さあ名前をば言うてみい。

豊 ぼくは、伊藤豊だ。

おばば ふむ。なかなか度胸のええところがみゆるな。さすがは男じゃ。そつちのわらしは何と
いうんじゃ。

啓太 ぼく——。(うつむいて答えられない)

豊 安田啓太君だ。

おばば ふむ。(二人をじろじろと睨む)

雪乃 おばば。そのわらしっ子たち、銭んこくれた。ほれお札——。

おばば なんじゃってえ！ 銭んこをばもろうた？(怒って) 雪乃！ お前は常陸坊海尊さまの

孫娘でないがえ！ 女おなこというもんはのう、かかわりのある男衆から、銭んこ取るのはかまわ

ねども、恵んでもろうは乞食の境涯じゃ。まんだわすらは乞食でねえわ。

雪乃 ならば、この銭んこ返すたらええべ。

おばば まあ待て。——おばばにええ考えがあつがらな。——さて、豊さに啓太さよ。あんたら

二人に、海尊さまの話をば、語ってきかすけえ、この銭んこは拝観料に納めてくれんかのう。

——どうじゃな。

二人 (うなづく)

おばば それでええか。

二人 (うなづく)

おばば やれやれ。これで双方とも得心がえぐ。えかったす、えかったす。なら雪乃。支度をば

せえ。

雪乃 へえ！

おばば、少年たちを壁際へさがらせる。雪乃、最前の木箱を引き出し錫杖をとって程よきところに

坐る。

おばば それでは、いまから海尊さまをば拝ませ申すじゃ。(うやうやしく蓋をとる)

雪乃 (錫杖をじゃらんじゃらんと鳴らす)

おばば —— そもそも常陸坊海尊さまというお方は、源の九郎判官義経公のおん供をばすて、遙

る遙る都からこの奥州へまいられたお人じゃ。さても判官義経公は、驕る平家を亡ぼし給い、

今は頼朝義経ご兄弟のおん仲、日月の如くご座あるべきを、言いかいなき者のざん言により、

おん仲たがわせ給う。頃は文治の初めつ方、判官殿には武蔵坊弁慶を先達として、おのおの

山伏の姿にさまを変え、いくかんなんを凌ぎつつ、この奥州路へくだられたのじゃ。志すと

ころは平泉の、藤原秀衡がもとであった。そのおん供の中に、海尊さまもおわせられたのじゃ。

雪乃 (錫杖を鳴らす)

おばば —— どうじゃ。えつぐ分つたであろう。丁寧におずぎばせえ。

二人 (手をついておじぎ)

おばば よすよす。(蓋をとじる) —— ありがたあいお姿をば拝観すて、あんたらは果報もんじゃ。

悲すいことや苦すいことがあつたら、海尊さまを心に念ずるんじゃ。すたら必ずお助けをく

ださるでや。おばばの言うことにまちげえはねえす。

豊 おばあさん。

おばば うん?

豊 でもどうして、海尊さまのミイラがおばあさんの家にあるの。

おぼば それはな、海尊さまがわすのところへ来られて、すばらくここでお暮すなされたが、ついに亡くなられたからじゃ。

豊 だって——。源の義経はずうつと昔の人でしよう？

おぼば そうじゃ。ずうつと昔の人じゃ。今からざつと七百五十年ほど昔になろうわい。けど、なんの不思議があるというのじゃ。海尊さまは七百五十年があいだ、この世に生きてきたお方で、言うならば仙人じゃった。——仙人はこの世に一人だけは確かにおられた。このわすが、この目でしかと見たのじゃ。

たちまち夕方はすぎて夜が来ている。家の中は暗く、月が昇りかける。ふくろうが啼く。

おぼば この目でしかと見た。ああ！ まるで昨日のごとのように思ゆるわ。あの頃わすは十八歳の若けえ娘であつた。心も体も軽うて火のごと燃えておつた。月の明るい、木の実の落ちる晩であつたがのう、わすは月の光に誘い出されて、森の中をば歩いていた。するとあの方が、黒い木立の奥から、すつくとわすの前へ姿をば現わすなされたのう。

庭の暗がりから、おぼろに人影が近づく。琵琶を抱いた老人が、低くうち鳴らす。

海尊（壮重に）それ本朝の昔を尋ねれば、武勇といえども名をのみ聞きて目には見ず。（琵琶）ま

のあたりに芸を世にほどこし、目をおどろかせ給いしは、しものつけ下野のさまのかみ左馬頭義朝が末の子、九郎

義経とて、わが朝にならびなき名將軍にておわしけり。（琵琶）

おぼば（十八歳）あなたさまは、どなたすな。

海尊 おお。わすの名か。わすは常陸坊海尊が成れの果てじゃ。

おぼば ええっ！ ならばあの名高けえ海尊さまとは、あなたのことすか。

海尊 おお。わすの名をば知っておるすか。

おぼば へえ。おほかの寝物語にえっぐきいておったす。けどお顔をば見るは今が初めて――。

海尊 それはそれは――。いや、面目もねえ身の果てじゃ。まんず聞いて下されえ。この常陸坊

海尊は、臆病至極の卑怯者じゃった。衣川の合戦の折り、このわすは主君義経公をば見捨て、

わが身の命が惜すいばかりに、戦場をば逃げ出すてすもうたのす。戦いくさがおそろすうてかな

わん。死ぬことがおそろすうてかなわん。それでわすは義経公を裏切り、命からがら逃げ失

せたのじゃ。

おぼば やあれ、恥ず知らずのことをばのう。そらアこの上もねえ卑怯未練というもんす。

海尊 なんだす。じゃけえ、わすは、逃げ失せはすたものの、ああ！ 済まねえことをばすた、わ

りいことをばすたと、われとわが身を悔んでおるすが、どうにもならねえのは、おれとわが

罪深え心のありようじゃ。わすはそんな時から七百五十年、おのれが罪に涙をば流すつづけ、

かように罪をば懺悔しながら、町々村々をさまようておるす。

おぼば えっく分るす。人というは、誰れも彼もはあ生れる前めえから、罪深けえ心をば持つて生る

るもんじゃと聞いておるす。わすらはみいんな罪ば作らねば、生きておられんもんじゃと聞

いたす。

海尊 なんだす。その通りだす。けどこの海尊の罪に比ぶれば、世の人々は、清い清い心をば持つ

ておるす。わすは罪人つみびとのみせすめに、わが身にこの世の罪科つみとがをば、残らず引きうけたす。み

て下されい、今ではもう、目も見えん。

おぼば はあれ。いだわすいお人じゃ。めくらにまでなつたすか。罪の報いじゃとは言ふものの、哀れな身の上になつたもんよ。さぞやつらからうなあ。

海尊 なんのなんの。この苦すみはみな一切衆生のためす。村の衆、町の衆の現世げんぜ安穩あんごん後生ごしょう善処ぜんじょを祈り申すじゃ。さらばす——。(行きかける)

おぼば 待つてけえされ。ともがくも、わすの家さま来なさるがええ、おかかとわすの二人きりの暮すじゃけえ、気安うにしなさるがええす。——さ、海尊さま。わすがお手をばひいていごう。

海尊 これはこれは——。

おぼば なんとまあ、ひるのごと明るい夜道かのう。お月さまがまんまるじゃ。(笑う)

海尊 さても武蔵坊弁慶がその日の装束は、黒革緘の鎧に黄なる蝶を二つ三つ打ちつけたるを著て、大薙刀の真ん中にぎり……。

二人、闇に消える。

家の中はしんと物音もなく暗く、庭には月光。

……ふくろうの声。

提灯をかざしながら、ことぶき屋がくる。

寿屋 (うしろへ) 先生！ こつちでがす。

先生、懐中電燈を持って足許あぶなく来る。

寿屋 いたこの家ちゆうはここです。

先生　しかし真暗じゃないか。本当にここへきてるのかな？

寿屋　山道で、へえ、炭焼のじいさまがたすかにこの家さ入いったのを見たと言ったす。

先生　うす気味がわるいねえ。

寿屋　声さかけてみるす。——お晩ですがす！——ばばさ、おるすか！　わすは麓のことぶき屋

じゃが——。(近づいて家の中を照らす)

雪乃は部屋の間で眠りこけている。

豊と啓太は、畳に顔を伏せている。

寿屋　先生！　おったすよ！　二人とも。

先生　(駆けよって)　おい！　安田！　伊藤！　お前たちはなんという非国民だ。このあいだで性

懲りもなく、また逃げ出すとは何ごとだ。先生に何度こういう心配をかけるんだ。そんなこ

とで、日本が戦争に勝てると思うのか！　おい！　起きろ！

寿屋　(二人の顔を持ちあげ、提灯の明りでつくづくと見る)　先生。ま、ま、こつちさ来て下せえ——。

こらア天狗さまに魂たまば抜かれたにちげえねえすよ。

先生　天狗？

寿屋　んだす。眼まなこさばちつとあけてるすが、わすらが誰かも分らんのじゃ。何んにも見えねえす。

無理に呼び戻すたらへえ、魂たまの入り場所が狂うす。

先生　君、そんな非科学的なことを——。

寿屋　いや、そうでねえすよ。今までにこつたらことになった女おんなやわらしが、麓の里にも三人か

五人はあつたす。魂ば抜かれつ切りになつてみなせえ、山さ逃げ込んで三年でも四年でもへえ、里さ帰えつてこねえす。天狗かくしというは、科学とは違うすよ。

先生　そうかねえ。

寿屋　そおつとおぶつて帰えりやんしょう。

先生　しかしね、このいたこというのは怪しからんじゃないか。子供をおびき寄せせるなんて。

警察へ届けるべきだと思ふね。

寿屋　とんでもねえすよ！　このばばさんは海尊さまの血筋じゃけえ、とんでもねえ！　さ、とにかくわらしを連れて行かには。

先生　なんだね、その何んとかの血筋というのは。

寿屋　道々話すてあげるす。(先生に一人を背負わせる)

先生　(よろよろして) 実際——僕は心臓弁膜症があるから——体によくないんだ。

寿屋　(もう一人を背に) まこと、らくでねえすな。——。(去る)

先生　僕だつて君——東京に妻子を残して——。(去る)

月光いよいよ明るい。

おばば、薄を肩に戻つてくる。

おばば　山も谷も、まひるのごと明るいわ。あんまり明るうて、なにやら心が乱れよる。——現
ねえす。(月を仰いで「海尊さま」とつぶやく)

——幕——

第二幕

(その一)

吹雪のふき荒れる三月の夜。

雪囲いをした旅館寿屋の帳場。土間につづく。

大きないろりに火が燃え、寿屋が鍋の中をかきまわしている。

壁際に、豊、啓太、ほかに三人の少年が体をよせ合い、じっと黙りこくって、先生の話聞いています。

先生 (少し東北なまりに感染している) ではあ、まんだ詳しい事は、東京からの連絡を待たねば分らん。しかしだな、ここが大切なところである。——いまわが国は戦争をしておるのだ。この戦争はこれからさきまだ何年続くか分らんのだ。百年戦争と言う意味は分っているか？
うん？

少年たち (うなづく)

先生 元気を出せ、元気を！

少年たち (口々に) はい！

先生 よし。われわれは堅忍持久、尽忠報国の火の玉となって、最後の一人になっても鬼畜米英

を撃滅せにやならんど。神武天皇はなんとおおせられたか。

少年たち (声をそろえて) 撃ちてしやまん! 撃ちてしやまん!

先生 そうだ。それが忠勇なる日本人の精神である。お前たちの東京の家は、敵のために焼かれてしまった。学校も焼けてしまった。お前たちのお父さんお母さん達に、万一のことがあったても、それこそ、日本人として本望である。大義のために喜んで死ぬ、それが大和魂だ。お前たちは、これくらいのことを悲しんだり、将来を悲観したりしてはいけない。(朗詠) 今日よりは、かえりみなくて大君の、醜しこの御楯みたてと出でたつわれは。——お前たちも、東京へかえりたいだとか、腹いっぱいご飯を食いたいだとか、そんな卑怯な心を起こしてはならん。お前たちのお兄さんたちは、あるいは学徒出陣、あるいは特攻隊の勇士となって、大陸に、空に、海に、勇敢に戦っているのである。すべては天皇陛下のおんため、国家のためである。それでは——(指揮をとる姿勢) 海ゆかば。

少年たち(合唱) 海ゆかば、水浸くかばね、山ゆかば、草むすかばね、大君の、辺にこそ死なめ、かえりみはせし——。

先生 では、先生の話はこれで終り。

少年たち (声をそろえて) 天皇陛下、皇后陛下、お父さん、お母さん、おやすみなさい。(おじぎ)

先生 よし。

豊 一同、礼!

少年たち (先生におじぎ)

寿屋 あんなあ、お前らに甘酒いっぺえずつ振舞ってやるべア。ほかのわらしだちに見せるじゃ

ねえど。みんなにくれるだけはねえんじゃからの。(少年たちに茶碗を配る) それそれ、熱いど。

お前だべ、こないだ便所さ入^へえって干柿くっっておったんは。——それ、落すな。

先生 廊下へ出て飲みなさい。飲んだら二階へ行っておとなしく寝る。その前に便所へ行くのを忘れるんじゃないぞ。

少年たち、茶碗を手に、黙々と去る。

先生 (咳く) やれやれ、こういう話は実のところ鬱陶しいよ。醜の御楯と出で立つわれはアか。

寿屋 まんず痛^{いた}わすいでねえすか。なら、あのわらしだちの親兄弟はへえ、一人残らず死んだわけすか。

先生 しいーっ! (廊下の方をうかがって) ——まあそうなんです。

寿屋 ふうん。すかすえらいことになったすな。一度にへえ五人も親無すつ子が出来つまったと

ははあ——。東京はどんな有様になったんだべか。

先生 とにかくね、どうなるのかねえ。

寿屋 (甘酒をすすめる) けど、まさかこの日本が敗けるなんつうこたあねえでがんしよう。

先生 そらアあんた。信念を持ち給え、信念を。——うむ! こりやうまい! ——何しろうちの学校は東京の下町だべ。あのわらし達の家は、おおかた学校の近所の商店だから、学校も家も一挙にやられたんだなア。

寿屋 空襲ちゆうは、そんなにえれえもんすか。

先生 んだ。じゅうたん爆撃というのが始まつてるそうだ。いまの五人のわらしの家族たちから、全然消息がなくなつたもんで、もしやと思うとつたんじゃ。やつと調べのついたところでは、一家全滅なんじゃ。

寿屋 ふうーん。身の毛ばよだつすな。

先生 よかつたよ、僕は。この正月休みに東京の妻子をさ、新潟の実家へ疎開させて。

寿屋 けど先生。あのわらしだちは、親がいねぐなつて、これからどうなるすか。

先生 まあねえ、親戚ぐらいは残つてるだろうさ。

寿屋 そうすな。すかす東京のわらしというのは、まんず気丈なもんでねえすか。親だちの生き死にが分らねぐなつたと聞かされてもはあ、涙こ一つ出さねえもんな。

先生 そりゃ僕が普段から鍛えてあるからさ。仕方がないよ、戦争に勝つためなんだからね。

寿屋 んだすな。

先生 しかし……今夜もよく吹雪くなあ。もう何力月降り続くんだ。冬ごもりというのはたまらん、実にたまらん。

寿屋 東京の人にやそうだすべ。おらだちや何代も何代も、こうすて生きて来たす。

先生 毎日毎日、来る日も来る日も吹雪だ。風がやんだと思うと、びちよびちよびちよびちよ、みぞれ雪だ。

寿屋 あと少すの辛抱す。冬もはあ峠は越えたけえ、やがて春さ来るべす。

先生 (いらいらして) きまつてるじゃないか。冬の次は春で、春の次は夏でそれから秋で、冬で、

春で、夏さ！ なに言ってるんだ。

寿屋 なんだす。——先生、ちいと外さ出掛けねばいけねえすな。雪国におってへえ、背骨さ真つすぐにすてると、ぼきつと折れよることあつじや。

先生 なんのことだい、そりや。

寿屋 こつからそう遠ぐねえとごじやが、大磯の虎御前とらごぜというのが住んでやす。

先生 何んだね、その、虎御前つて。

寿屋 十郎祐成の嫁おなごこじやつた女す。その妹で少将ちゆうのおおつて、そらア五郎時致ときむねの嫁こじやつた女す。その二人がへえ、町はずれに住んでるでがす。

先生 ……………？

寿屋 すばらく前まじや、十郎五郎の実のおふくろ様ちゆうばばさと三人ぐらすだつたす。

先生 ばかなことを言つちやいかんよ、君。そりや曾我兄弟の話だろう、仇討をした。

寿屋 なんだす。

先生 なんだすつて……君ね、祐成時致というのは鎌倉時代……ふん！ ばかばかしい！ そりや僕も退屈はしてるさ、してるけどね、あんまり下らないことを言うのはやめてもらいたいよ。

寿屋 けどはあ、現に本人だちがそう言うんでがす。おらだちが気ままにこせえた作り話たア違うだがらね。

先生 じゃ、あんたは、いやこの土地の人はだね、本気でそう思ってるの？ ——ええ？ ——
そうなの？

寿屋 (むつつりと) けど、本人だちがそう言うんですが。

先生 それはね、いつかの常陸坊海尊と同じ手のやつさ。荒唐無稽もはなはだしいじゃないか。
下らない！

寿屋 …………… (黙ってお茶を飲んで)

先生 そんな非科学的なことでは君、戦争に勝てないよ。——そうだろう？

寿屋 …………… (黙ってお茶を飲んで) それは先生の問いを全く問題にもしていない)

先生 (いらいらして) ええ？ ちがうの？ ——なんとか返事をし給え、なんとか。まるで米俵
みたいだね、君の頑固さは。

寿屋 (むつつりと) けど、本人だちがそういうんじゃない。

先生 ああ、あ！ いつまでこんな疎開生活を続けなくちゃならんのだ。毎日みてる顔といえ、
子供たちの哀れっぽい、ひもしそうな顔と、君たちの渋紙色の、何を考えているのか、わけの
分らん顔と、無智もうまいな話と、そうしてじいっと背中を曲げてだよ、春がくるのを待っ
てるだけなんだぜ。

寿屋 すかたなかんべア。おらだちは何代も何代も、こうすて暮すてきたでや。

先生 よくも頭が何ともならんもんですよ、よくも平気でいられるもんですよ。あああ！ 今年

はもう昭和二十年か。—— (頭をかかえる) 吹雪がひゅうひゅう、みぞれがびちよびちよ——。
寿屋 (いろりの灰の中から大ぶりな爛瓶を抜き出す) 先生——。丁度ええころ加減にぬくまつたす。
ぐうっとやって寝つもうだな。

先生 やあ。どぶろくかい？ いつも済まんア。たのしみと言うはこれだけす。なら寝べかな。

せめてはあ東京の夢でもみたいよ。——じゃおやすみ。(去る)

寿屋 へえ。おやすみ——。

寿屋、灯を消して去る。

吹雪の音

どこからか射しこむ雪明りといろりの残り火がちらちらする。

くらやみから、啓太、そっと這い込んでくる。いろりのそばの鍋の蓋をとり、指を入れてなめてみる。

啓太 (そっと) 伊藤君！ あるよ！

豊、這ってくる。

豊 (そっと) あるか！

啓太 あるある——。(鍋の底に、わずかに残った甘酒を二つの茶碗に分ける)

豊 (じっと見ている) こっちの方がすくないよ。

啓太 うん——。(注ぎたす) もうないや。

豊 そいでいいよ。(飲む)

啓太 (飲む)

豊 あまい——。

啓太 おいしいね。

豊 (からになった茶碗をなめる)

啓太 ぼくのお母さんは死んでなんかいないよね。(茶碗の中をなめまわす)

豊 死んでなんかいないさ。先生の話なんかみんなうそだ。

啓太 うそにきまつてるよね。

豊 ぼくのお母さんだつて生きてるよ。お父さんだつて兄さんだつて、みんな生きてるさ。(おし
やもじを指でこすつてなめる)

啓太 ぼくんち、兄さんはいないんだ。妹はいるけど。(鍋の中を指でこすつてなめる)

豊 可愛い子かい？(啓太と一緒に鍋の中をこすつてなめる)

啓太 まあね。

豊 どのくらい可愛い？ あの子ぐらいか？ ほら、雪乃ちゃん。

啓太 あんなに可愛いくないさ。

豊 遊びにくるといいなア雪乃ちゃんが。

啓太 きやしないさ、こんなとこじゃ。

豊 いつか行ってみようか。(くすくす笑う)

啓太 みんなには秘密だよ。(くすくす笑う)

寿屋、そつとくる。

寿屋 誰だア。そこでへえ、こそこそ語っておるは。

二人 (わつと言つて部屋の隅へかたまる)

寿屋 (電燈をつける)——また盗みぐいにきよってからに。誰と誰じゃ。顔さみせれ、先生に言いつけてやっがら。——ふうん。豊さと啓太さか——。

二人 (堅くなつてうつぶんでいる)——。

寿屋 ま、今夜はかんべんすてやるべす。くいもんがたんとあらば、お前らに腹充分、食わすてやりてえども、おらとごだつてお前ら疎開わらしを十五人も預かつたけえの、商売ははあ休業同様だべ。おらの身にもなつてみれや。ああ？ 先生にこのざまさ見つかつてみれ、また殴られつど。

豊 ……………。(しくしく泣く)

啓太 (叫ぶ) かいそんさまあ！

寿屋 ああ？

啓太 かいそん！ かいそん、かいそん、かいそん、かいそん、お母さあん！(畳に突っ伏し、

わつと泣く)

寿屋 ……………。

先生、何かとくる。酔つてふらついている。

先生 なんだ、お前たちは！ おい！ 立て！ 男のくせにめそめそするやつは先生が気合いを入れてやる。さあ立て！

寿屋 先生、まあええでねえすか。わらしというは頑是がんぜねえもんだす。何でもねえだから——さ、さ、お前らは二階へ行くべす。ほれ立つんじや。(少年たちを連れて去る)

先生 甘やかしたらきりがありませんよ！——（独り言）なんだっていうんだ、あいつら。何が悲しいっていうんだ。僕だって一生懸命やっているんだ。先生なんて、まったく……子供はいよいよ、わいわい泣けるんだから——。（微吟）世の中は、空^{むな}しきものと知る時し、いよよますます、悲しかりけり。（いろいろの残り火をみつめる）

吹雪の音。

その深く遠くから吹いてくる風の音に、女の声がまぎっているように聞える。

“おぼんですう——おぼんですう——”

先生 （ぞつと背中に寒さを覚える）——。

風に吹きちぎられながら “おぼんですう——おぼんですう”

先生 こ、ことぶきさん！ ことぶきさん！

寿屋、くる。

寿屋 なんだなす。——どうなすった。

先生 そ、そとに——外に女が、女だよ、あれは——。

寿屋 ……………？

先生 ほ、ほら——聞える、何か言ってる、誰か、女がいるんじゃないのか。

寿屋 おらにや聞えねが——。

先生 み、みてくれ、戸を叩いたよ、たしかに——ほら！ ほらほら——。

寿屋、土間へ降りて、雪靴と簀^{みの}と笠をとってくる。

寿屋 先生——。これははくんじゃ。

先生 ど、どうするんだ。

寿屋 ええがら、おらの言う通りにしろや。

先生 (雪靴をはく)

寿屋 これば着て出かけるんじや。

先生 ど、どこへ行くんだ。

寿屋 先生もはあ、やつはこの土地の者もんになったがすな。ありや雪こがしゃべってるす。雪こも言葉さ語るもんらしいでや。

先生 ……………。

寿屋 まんだ聞えるすか。

先生 ……どこへ行けばいいんだ。どうすればいいんだ。

寿屋 虎御前か少将か、あの女じよらも寂さぶしがってるべっしや。訪ねてやんなされ。

先生 (悄然とうなだれる) どこへ行けば会えるんですか。

寿屋 道はへえ一本道じゃけえ、迷うこたあねえべア。ござまっすぐ山の際までいくと、神社があつたべや。その横手ん方みればすぐ分るす。ちっこい窓こに灯りばつけておるは、そこ一軒だけだがす。

先生 (消え入るように) なんと云えばいいんですか。

寿屋 十郎祐成じゃと言ええええす。それで戸があがねがったら、五郎時致じゃと言うだな。そ

んでも戸があがねば、すかたねえす、明日の晩いぐすな。けどはあこんな吹雪く晩じゃけえ、まんず心配ねえべす。

寿屋、くぐり戸をあける。吹雪が烈しく吹きこむ。

先生、笠で顔を隠し、黙って出て行く。

寿屋、くぐり戸を閉じ、灯を消して去る。

吹雪の荒れる音。

“おぼんですう——おぼんですう”

(暗転)

(その二)

おばばの家。

五月の午後。家のまわりと庭に、梅、桃、桜がいつとときに咲いている。

水嵩の増した川のひびき。鳥どもが鋭く啼きかわす。

部屋の隅に、豊と啓太がきちんと坐っている。二人とも黙りこくって、畳をみつめている……。

豊 (そっと) 安田君——。

啓太 なにさ。

豊 君のお母さんも、ぼくのお母さんも空襲で死んだんだぜ。家が焼けるとき一緒に死んじゃったんだぜ。

啓太 生きてるったら。ぼくのお母さんは生きてるんだ。ぼくはお母さんと会ったんだもの。
豊 いつ？ どこで会ったんだ。

啓太 ここでさ。ここにいればお母さんが会いにくるんだ。

豊 うそつき！

啓太 じゃ、うそだと思ってればいいさ。でもいまにわかるよ。

二人とも堅く口をとぎし、畳をみつめている。

鳥どもの声。

雪乃と山菜の籠を抱えたおばばが帰ってくる。

雪乃 なんじゃおめえら。あっけらほんとすて。

おばば やあ啓太さか。えぐ来たな。すばらく見えねがったがら、風こでも引いたんでねえがと心配しとったど。

啓太 伊藤君がね、僕を嘘つきだつて言うんだ。僕のお母さんは生きてるよね、死んでやしないよね。

おばば そうとも。まこと生きていなさるとも。(山菜を選びわかる)

啓太 (豊に) ほらみる。僕のお母さんは百年だつて千年だつて生きてるんだ。雪乃ちゃんだつて知ってるよね。

雪乃 啓太さはどう何度も母っちゃんに会ってらなア。

豊 ほんとう？

啓太 ほんとうさ。でも僕と雪乃ちゃんとおばあさんと、三人の秘密なんだ。

豊 僕はそんなこと信じないよ。(帰りかけて)先生と宿屋のおじさんと、役場の人が話していたじゃないか。みんな死んじゃったんだ。手紙だつてこないじゃないか。会いにもこないじゃないか。(泣きそうになる)嘘なんか言うのやめろ。安田君の嘘つき。三人の秘密なんて……僕は知らないよ。

豊、しょんぼりとして去る。

啓太 伊藤君——。君もおばあさんに頼んでみろよ、お母さんに会えるんだつたら——。

おばば (山菜を選びながら) どうじゃへえ、この愛めくすい香りのすることア。長げえひもずい冬さ
すぐすてきた甲斐のあつたわ。

雪乃 おばば。遠山の桜がひらいたでや。おらア旅さいぎたくなつた。どつか遠くさいがねが。

おばば お前は浮かれ心のあるわらしじゃな。行く末が思わるるわ。

雪乃 ここばしおるんはもう飽いたんじゃ。旅さいげば、もつとええことがあるべっしや。

おばば ここは海尊さまゆかりの土地じゃ。気まま勝手は許さんど。さ、啓太さと二人で、もつと山菜を摘んでくるんじゃ。

雪乃 おらアひとりの方がええ。

おばば 二人でいげてば。

雪乃 (仕方なく) そんならついてこう——。(さっさと行ってしまふ)

おばば (啓太に) 雪乃と仲ようせねばいかんど。ええか。

啓太 ああ。あとでお母さんに会わせてくれる？

お婆ば よすよす。あんたの頼みなら何んでも叶えてやるど。

啓太、籠を持って去る。

お婆ば (見送って) 男わらしというはええもんじゃ。雪乃と啓太か……。ふむ。まあよかろう

……。(背戸へ去る)

繁みから豊がそつと出てくる。啓太の去った方を眺める。

虎御前と少将、荷を負った旅仕度のさまでくる。荷には月琴と三味線が結びつけてある。

虎御前 あれ！ あんた——。あんたは寿屋におる疎開つ子でねえか。

豊 ……………。

虎御前 そうだべア。先生さまはどうすなされた。

豊 先生？ ……先生はいないよ。東京へ行っちゃってまだ帰ってこないよ。

虎御前 でも、また帰ってきなさるのじゃろう？

豊 知らない！（走り去る）

虎御前 (涙を浮かべて) 少将よ、先生さまは、わすをば忘れてしまいなさったのではなからうか。

せめてもう一目逢いてがった。逢いてがった……。

少将 姉^{あね}ちゃんはまんだあん人のことをば思うとるがや。なんもかんも前世の約束ごとでねえが。

あんたもうだでえ人じゃ。

虎御前 そらよう分つておるども……わすは先生さまがいどしぐてならねえす。

少将 好きだのいどしいだの、そつたらことばし言うておる時でねえわさ。——ばばさま。町から虎と少将がめえりやすた。

おばば 背戸から急いでくる。

おばば やれ！ あんたらじゃったか。懐すいど！ 虎御前も少将も変りんのうて、えがった、えがった。

虎御前 へえ、おかげさんす。ばばさんもこの冬中堅固じゃったようすなす。祝着ん言いす。

少将 ばばさはへえ、だんだん若うなつていくでねえすか。また人魚の肝ば食うたんと違うすか。

(笑う)

おばば へっへっへ！ あんたらこそ冬ごもりのあいだ中、たあんと舐ぶつたらすいど。ちやあんと顔に書えてあらア。(笑う) けど、あんたらの登つてくつと、えがさま春さ来た思いのすつど。ま、二日なりと三日なりと遊んでいげや。

少将 それがのう、そうしてはおられんのす。日の昏れんさきに南の峠さ越えねば。

おばば 急からすい。あんたらの曾我祭文を、今夜はあんじましく聞かすてもらうべと思つたん

じゃが……そう言やア長旅の仕度じゃの。なんとすた。

虎御前 まあ聞いてたもれ。わすらは町から追手のかかるかも知れん身の上になつたす。久すう

住み馴れたわが家を閉ざすてきたすよ。

おばば なんじゃと。あんたらの由緒の深けえ曾我屋敷をば閉ざすてきたと？

虎御前 へえ。

お婆ば そら聞き捨てなんねえど。あんたらの姑さまとわすとは長げえ昵懇じゃ。わけを言うて
みれ。仔細しさいによってはお婆ばが宥ゆるるさんど。

少将 姉ちゃ。ばばさは何んにも知らねらすいでや。あんなア、役場と警察が思いもよらん意地えじ
ぐされ始めよつたんじゃ。おらだちばかりか、いたこのばばさだちまで警察さずらざらあと、
呼び出されてがらに、眼玉まなこたまのひつくらけるほど叱られたでや。

お婆ば そらなんでじゃ。何が悪いというんじゃい。

少将 おらだちにも、すかとは得心がいがねがったが、いまはへえ、戦争の時代じゃけえ、いた
こじゃの曾我屋敷おなごの女じゃの、そんなえぐなし者は、人非人じゃと叱るのす。これまでの暮
すを変えねば、警察さ投げ込むとおどすんじゃ。

虎御前 わすだち二人は、祐成時致の嫁こで、けつすて怪すい身の上のもんでねえと、なんぼ話
すても聞き入れてくれん。執拗しつこくわすらを叱るばっかりじゃけえ、つらぐて、つらぐて、町
にやおられんのす。

お婆ば うだでえ世の中になつたもんよのう。そんな話はへえ、生れでこの方、聞いたことがね
え。なんであんだらやいたこが人非人なんじゃ。

虎御前 わすだちは、人の心をばかき乱す所業ばしてるといふのす。

お婆ば やれやれ。えがさま役場も警察も、物の道理をばわきまえね衆じゃ。あんだらがいねぐ
なつたら、こごらあたりの祐成時致だちはどうなるべア。

虎御前 んだす。

おぼば 哀れなことになるでや。

少将 なんだす。

おぼば あんたらを恋いこがれて、思いが狂うべっしや。その方がよっほど心をかき乱すでねえが。

虎御前 なんだす。(しくしく泣く)

おぼば まんず世も末じゃわ。みたぐねえ!

山伏登仙坊、息を切らして走ってくる。

登仙坊 おぼば——おぼばよ! 前代未聞じゃ! 開關以来のおおごとさ起きたす!

おぼば 騒がすい! ——あんた生きておったんか。この冬中どごさもぐり込んでおった。春に

なつても消息がねえけえ、おおかたどごぞで無縁仏になったべアと思うておったがの。

登仙坊 縁起でもねえ。ま、ま、一別以来の物語はあとにすて、前代未聞の知らせがあつてとんできたんじゃ。やあやあ。あんたらは虎御前と少将でねえが。いつ町さ逃げ出すた。役場の

衆があんたらを尋ねまわっておったど。

虎御前 ひええ! ならやつば追いかけてくるすか。

少将 姉ちゃ。とらまえられたらそれまでじゃ。逃げらるるだきや、逃げべア。

登仙坊 そうせえ、そうせえ。(荷負いを手伝う) わすとて同じ追わるる身の上じゃ。そうでなく

ば、あんだらの送り人どになつてやりてえけど、まこと思うにまかせん仕儀じゃわ。

少将 言うとるわ! あんたのような人に送つてもろうたら、のちの思いがおそろすいでや。

(笑う)

虎御前 そんならばばさま。粗相なお別ればしやす。どうかへえ息災でなあ。

おばば 気をつけて行げや。

虎御前 へえ。ありがとさんす。

少将 戦争が片じいたら、じつきに戻ってくるす。けどはあ、もすかすたら旅さぎで、わすら、

玉の輿さ乗るかも知れねえすよ。(笑う) さいなら——。

登仙坊 達者で行げや。

虎御前、少将、去る。

おばば あたらあじよの女じよらも流れもんになったがや。悪りい時勢に会うたもんよ。

登仙坊 達者でいげやア——。なんやらわすまで切せつねぐなってきた。なあおばばア。ばばさよう。

わすの方をば見てくれって。

おばば なんじゃ芋山伏が甘だれ声き出すて！ またぞろ、わすのとごさ転がりごむ算段じゃろ。

登仙坊 とんでもねえ！ まこと前代未聞しっかいのことが起きたんじや。もうはあ、あんたは神おろす

も口寄せも占しっかいいも、悉皆しっかいお上しっかいからしっかいご法度はつとになつたんじや。そもそもいたこじしっかいゃの山伏しっかいじゃの

は、人の心を惑わす者共じゃけえ、向後きょうご一切、まじないも御祈禱ごきとうもふつつりとやめい、やめ

ねば軍需工場ぐんじゆくわうさ徴用ていじゆうに行げいと、きつうい命令めいれいなんす。

おばば 行ったらええでねえが。銭ぜにんこになるべす。

登仙坊 いやじゃいやじゃ。わすはいやじゃ。軍需工場ぐんじゆくわうというところは、わすらにへえ、死ねくた

ばれ仕事をばさせるとござす。

おぼば 仕方ねえべア。わすは昔から、銭んこねえ者と首のねえ者とは、話をすたことねえでや。

登仙坊 そんならおぼばはどうするのす。もういたこはご禁止じゃ。百姓するにも田ん圃はなす。

商売するには銭んこはなす、ミイラになるほかねえべす。

おぼば なんじゃと。

登仙坊 も早、絶体絶命じゃのう。わすは軍需工場、あんたはミイラ。へへ……。

おぼば あつけ山伏め！ わしや、ミイラになるは覚悟じゃ。海尊さまの家内ともあろうわすが、いたこでねくなるほどなら、命の終りさ来たも同様じゃ。——よすよす。ミイラ行につくべす。

登仙坊 おぼば——。

おぼば 雪乃の行く末がちいと気がかりじゃが、それもせん方ねえべア。わすの心はこれで決まった。

登仙坊 そ、そら分別が早すぎるす。ま、ま、ともがく——。

おぼば この期ごになって止め立ては無用じゃわ。あんたに頼みてえことがあるでや。ミイラづぐりの法をば教ゆるけえ、えつぐ耳こひろげて聞くじゃ。これは海尊さま直伝の秘法よ、頭こさげて承らんかい。

登仙坊 へえい！（平伏）

おぼば まんず五穀を絶つこと三十日、木の実、草の根を絶つて三十日、水気を絶つことおおよ

そ二十八日、あわせて八十八日にして、わすの息は絶えるべっしや。息の絶えたを、しかと確かめたら、あの谷川さ持ち出すて、三日三晩があいだ、一刻も手をば休めずに洗い清めるんじや。それがらここへ持ち帰えって、軒端の、あのあたりがええべす、風通しのええとごへはあ、ぶらさげて、七日七晩があいだ蔭干すにするのじや。

登仙坊 ええっ！

おばば それでミイラが出来もうすじや。海尊さまと、比翼のミイラになるというは本望でや。

登仙坊よ、あんたにえつく頼んだけえの、必らず仕ぞくなえばせんようにしてくださいや。

登仙坊 (胴ぶるいがとまらず) そればっかりは勘弁すてけれ。わすにお狐さまでもたからねえ限り、そんな恐ろしい手助けは出来ねえす。この通り頼むけえ思い直すて下され。なあ、おばば。(すりよって) あんた、まんだミイラになるは惜すいでや。あんじましく暖ぬくてえ肌をばし
てるでねえがや。のうおばばよう。

おばば (突き離して) 情けねえ山伏じや。そんつくたら、あんたにゃ頼まねえす。雪乃に頼むほ

かねえべす。雪乃はどこぞへいったんじやろ。(庭へ降りる)

登仙坊 どうでもその気かや。

工員風の若い男1と2がふくらんだリュックを背負って通りかかる。闇市へ物資の交換に行くらしい。

若い男1 やあ見ろや。あのいたこはまんだ無事でおるぞ。おい！ めくされ婆。お前はえぐも

警察さ放りこまれねえもんだ。

若い男2 ふんどだ。戦争はずつきに終るべえなんて、変なこと言いふらしたんはお前じゃそう
な。駐在がへえ頭が湯気こだすて怒ってるど。

おばば 鼻たれめ！ 占いにしながらそう言うたままでよ。戦争はの、この新暦八月のうち、おそ
ぐも月の末までにや終えると出たんじゃ。

登仙坊 おばば！ やめれ——。

若い男1 どうじゃ、まんだ世迷い言をば述べとるわ。あきれたもんだ。

若い男2 おおかた頭さきたんだべア。

若い男1 そんつくたら日本が勝つか、アメリカが勝つか占うてみれ。

若い男2 そだそだ。お布施ばうんと払うてやるけえ占うてみいや。さあどっちじゃい。

若い男1 あっちゃか、こっちゃか。

若い男2 あっちゃか、こっちゃか。

おばば 占うてやつてもええがのう。お前らの背中ん頭陀袋はなんじゃ。工場さ狡るけ出すて、

闇市通いだべ。そんな汚ねえお布施で、わすの占いが当るもんか。さつさと早よう通り抜け
ろ。みたぐもねえわ！

若い男1 気っ張りの強えばばさだ。駐在に告げてやるど。

若い男2 んだ。出まかせばし、こきよつて、いまに口から腐つていぐべ。

男たち去って行きながら、あっちゃか！ こっちゃか！ と言って笑う。

登仙坊 あんなことさ言うでねえすよ！ あんたという人は——。時節がわりいで、町方村方の

衆には頭こ低うしなされ。

おぼば —— 登仙坊よ。

登仙坊 なんすか。

おぼば わしゃ、気が変わったでや。ミイラ行につくのはやめにしよう。

登仙坊 思い直したか！ やあ祝着じゃ！

おぼば 命が惜しくなったんではねえさ。わすに、逢いにくる者があるんじゃ。どうやらわしゃ、

それが愛いとしぐてならねぐなってるのじゃ。

登仙坊 ええっ？ —— そらア男すか？

おぼば ふっふふ……。

登仙坊 (きつとなつて) いくつぐれえす。どんな男す。

おぼば まんだ若けえわ。ええ男よ。わすがミイラになったら啓太がさぞ嘆くべっしや。それが

いだわしぐて、わしゃミイラにはなれねえすよ。(花の咲いた庭木のあいだを樂しげに歩きまわる)

登仙坊 ええ！ あんたという女おなじは……その物思わしげな、浮ぎ浮ぎした顔……それほどあんた、

その若え男がめんこいすか！

おぼば そうとも。この頃でははあ、啓太が三日みえねば切ねえ。

登仙坊 そらあんまり酷むじいす。(涙) くち惜すい！

おぼば あきらめてもらうす。愛いとしいという心は分別のほかじゃけえの。

登仙坊 —— えっぐ分った。わすとして男の端切れじゃ。あんたの心変りをば知らされて、のめのめここにはおられん。出ていぐす。まこと出て行くじゃ。—— けど、今じゃからいうでや。

あんたに可愛いがられた男は、一生うかばれん者になり果つるんじゃ。この登仙坊玄卓が、まのあたりの生き証人じゃわ。あんたに近よったばっかりに、わすは山伏修験道の修行をばやりぞくなつて、魂をば引き抜がれたんじゃ。その啓太とやらいう男も、まんずわすのような、すたれ者にされよるわさ。(涙を流して) わしや、生きたままミイラにされたも同じでや。海尊さまの祟りじゃわい—— 祟りじゃわい——。(泣き泣き去る)

お婆ば ふん！ ひとり合点の鼻ぐされめが。やつとこれで厄介もんをば斬り捨てた。(笑う) わしや、海尊さまの血筋をば絶やすわけにはいがねえのじゃ。まんだミイラになつて相済もかい。

啓太と雪乃戻ってくる。啓太はめそめそと涙をこぼしている。

お婆ば やあ戻ったか。こつちさこい。

雪乃 おらあ啓太さみてえな弱虫はきらいじゃ。ずつきに泣きよるわ。

お婆ば (啓太に) どうすた。腹でも痛えが？

啓太 (首をふる) ……………。

お婆ば こおれ、男らしうせんと雪乃にきらわれるど。

啓太 ぼく、お母さんに会いたい。会わせてよ、すぐ会わせてよ。

お婆ば よすよす。会いとうなればいつでも会わるるわ。人間はのう、けつすて死にはせんのだ。

や。雪乃、仕度をせい。

雪乃 へえい。

雪乃、大数珠、鈴（大小の鈴をつけた祭具）をとり並べ、海尊のミイラ像の箱を少しあける。

おばば （啓太に）心をあんじましく静かアにすておかねばいかんど。騒がすい心でおっては、神さまはおくだりなさらんじゃ。分ったか。

啓太 ああ。

おばば さ、拜むんじゃ。（合掌）

滲太 （合掌）

おばば ……雪乃、ええか。

雪乃 へえ（鈴をとって唄うように）ほんとうを云うなれば、わらしは相手にせんきまりなのじゃが、啓太さまのまごころに免ずて、おばばが力をば貸すてくれるのす。それを忘れてはえぐね

えす。（しゃらん！ と鈴を鳴らす）

おばば さて啓太よ。苦すいとときや悲すい時には、なんと言うて願うのであつたかのう。言うてみい。

啓太 （小さく）かいそんさま、かいそんさま、かいそんさま。

おばば そうじゃ。おばばの言うとおりに、心の中でお唱え申すんじゃ。それ雪乃！

雪乃 へえ。（鈴を鳴らす）

おばば （大数珠をもんで）海尊さま、海尊さま、海尊さま。なにとぞ安田啓太が母をばおつれ下

され。哀れなるものにお慈悲を与えたもれ。よるべなき者にお手をあたえたもれ。願わくは啓太の母をば使アさしめ。(くりかえす)

雪乃 (烈しく鈴を鳴らす)

おばば、苦悶のていとなり叫び声をあげて畳に突っ伏す。

雪乃、ゆっくりと鈴を鳴らして、打ちどめる。おばば、ゆっくり起き直る。

おばば 啓太——母っちゃじゃ。えぐも会いに来てくれた。母っちゃもはあ、啓太に会いたくてなんねがった。まこと、会いてがったでえ。さあさ、もつと母っちゃのそばへこいや。

啓太 お母さん！

おばば おお、おお、啓太はめんこいわらしじゃのう。東京でへえ一緒に暮すていた頃とちいとも変らんなア。母っちゃはなんぼ嬉すいか分らんど。いつもこうすて会うべなア。

啓太 お母さん。僕ね、東京へ帰りたい——。

おばば そらアえぐねえな。母っちゃも啓太とくらすてえども、いまの東京ははあ、アメリカの兵隊が、鉄砲ば持つて攻めよせておるけえ、お前のようならしが来たら、何されつか分んねえど。寂すいだべども、田舎におれや。母っちゃの言うこたア分るべア。

啓太 じゃ、お母さんの言う通りにするよ。

おばば うんうん。いだわすいことを言ってくれるのう。母っちゃはいつも、啓太のことばし思うているんじゃ。体ば大切にせえよ。先生さまの言いつけ守って、早うに大きうなれや。

啓太 (涙声になって) ああ。ぼくの家はどうなったの？ お父さんは帰ってきた？

お婆ば お父^どうはのう、まんだ戦争から帰^けえってこねえ。家はへえ焼けてしもうたわ。けど、うだでがって力落すたらえぐねえど。お父^どうは死にやアせん。啓太に会いに帰^けってくらア。家ば焼けても、いつかお前^{めえ}が建てりやええだべさ。この世のこたア、いつとき姿をば変えるだけじゃ。なんにもなぐなつたわけでねえわ。もとのまんまと変りねえわ。なア、啓太よ、そうだべや。

啓太 ああ。

お婆ば 母^{ちや}に会いてぐなつたら、雪乃^{ちや}のお婆ばに頼めや。お婆ばは母^{ちや}の代りに啓太をいどしがってくれべす。お婆ばのそば離れんじゃねえど。

啓太 ああ——。

お婆ば なら、また会いにきてやつがらな、おとなしう待つてろや。ええか。

啓太 お母さん。もっとここにいてよ！ ねえ！

お婆ば 母^{ちや}はさまさま忙しいんじゃ。ちいせえわらしみてえに、後さ追うでねえど。そんなら啓太よ、元気でいろや。

啓太 お母さん——。(畳に突っ伏して泣く)

お婆ば (苦悶。呻き声と共に倒れる)

雪乃、鈴を烈しく鳴らして打ちどめる。

雪乃 神おろすは終つたす。啓太さの母^{ちや}はもう帰^けえつたす。お婆ばはいま気をば失うておるで、静かにせねばえぐねえよ。すいーっ！(鈴を置く)——さ、これで終わり。

啓太 ぼく、気持がさっぱりした。

雪乃 だべア。母っちゃに会えてえがったべ。

啓太 伊藤君ばかだなあ、帰っちゃって。今度またつれてくるよ。

雪乃 もうはお帰んな。おばばはまだ気ば失うてるけえ、そおつと帰れ。じゃ、さいなら——。
(手籠を持って出る)

啓太 どこへ行くの？

雪乃 峯の桜をみにいくんじゃ。ついてきたらいかんど。

啓太 どうして？

雪乃 おらアひとりで遊ぶのが好きなんじゃ。(去る)

啓太 またくるからね。(啓太、雪乃の方をふりかえりながら去る)

繁みの蔭からそつと豊が出てくる。驚きと怖れで声も出ない。

おばばが体を動かすのを見て、あどずさりして繁みの中へかくれる。

おばば、むくむくと起き直る。

深い息をつく。夢をみているような目で庭の桃を眺める。

おばば (花の梢を仰ぐ) 海尊さま。ここには男つ切れきが一人もねえけえ、まこと行く末が心許ね

ぐてならなかつたす。けど、まこと海尊さまのお引き合せじゃ。わしゃ、あの啓太が気に入った。わすの思い通りになる男つ切れが入用なんす。あの啓太をば今が仕立てあげて、

海尊さまのお守りばさせ申すでや。わすの企みに手をばお貸したもれ。(合掌して) 海尊さま。

ああたはいつの世にも、生きておらねばならぬお方じゃ。この世が極楽浄土になったらばともがく。——（静かに合掌する）

（暗 転）

（その 二）

寿屋の帳場。

十月の曇った朝。遠くで子供が打っているらしい祭太鼓のまだるっこい音が聞えてくる。

あがり、がま、ちに体をよせあい、黙りこくって腰をかけている少年三人。

豊、正男、勇一。小学帽をかぶり運動靴をはき、いつでも出発できるようにしている。それぞれのうしろに、夜具の大包み、行李、手提げ、学用鞆などが積んである。

………

役場 （奥から話しながら出てくる）もうへえ戻ってくるべすと思うすが——。待たすて済まねえすな。

あっぱ（農家の主婦）、だんな（製材所）、親方（漁師の網元）つづいてくる。

役場 もう一人のわらしき尋ねて行つたす。おおかたへえ、そごらあたりをうろろすてるべと

思うすが——（少年たちに）お前ら、仕度はもうええじゃな。忘れ物はねえがや。

少年たち（うなづく）

親方 そらあそうだ、まんまこ食う預りもんだではア。

役場 戦争この方、疎開わらしの受け入れて役場は頭こ痛かったす。んでもお蔭さんで終戦になりすた。ところがへえ、このわらしだちはなんと、今もって引取り手がこねえす。かと言つたつちや、このまま寿屋におぐわけにもいかんすのう。

あつば んだなす。

役場 それだけではねえす。わらしだちの先生がらして、東京さ連絡に行くと言つて出たままはア、音沙汰ねぐなつて、ついに行方知れねぐなつたすよ。

だんな 何んと意地えじのねえ先生だべか。

あつば けどはア先生さまにも、いろいろ都合はあるべす。

だんな 何とすてそれが都合で済むでや。無責任と言うだわ。

親方 んだな。責任ねぐてかまわねえがら無責任というのがや。先生というは気楽なもんだ。

(笑う) 日本は無条件降伏をばすたべア。そのまねごとすたんだべさ。けど日本はさすがでねえすか。同じ敗けるにしたつちや、無条件だもんな。なんにも敵に条件つけさせねえというは偉えもんじゃ。敗けたつて気楽なもんよ。(笑い)

役場 ——どごまで話すたべか——。んではア、こたび役場とすて、協議に協議さ重ねた末、旦那衆やおがさまだちに、このわらしだちを引受けておもらい申すことになつたす。まこと感謝にたえねえす。これもはア御縁じゃけえ、どうがいく末ながく、実の親の心ではア、わらしだちのことは、あんじましくお頼みするす。(丁寧におじぎ)

親方 おらア二人もらつてぐ約束じゃ。お前ら、おらどごさ来れば、魚はなんぼでも食わすてや
るど。舟に乗って魚をとりにいぐんじゃ。一人前になったれば、めぐい嫁こを持たすてやる
べす。(笑う)

役場 どうだ、ええだべア。あつちやのお父^どさまは製材所の旦那じゃ。あつちやのお母さまは農
家のあつぱじゃど。よろしぐと挨拶しろや。ああ？

少年たち (いよいよ小さく体を寄せ合つてうつむく)

役場 なんとすた。六年生にもなつてはア。

勇一 (泣き出す)――。

役場 これ――。(笑つて)わらしだちは、恥んずがすがつてるす。ふんとは嬉しぐてなんねすよ。
わすにはえぐ分つてるす。

だんな 東京もんは気がちせえがらな。

あつぱ まんず、いだわすいでねえが。なんぼ親だちが死んだとすても、親戚ぐれえあるべすと
思うがのう。(泣く)

だんな 都会もんは薄情じゃけえ、おおかた忘れつまつたんだべさ。

親方 んだべア。

役場 まつだぐ、こたびは骨折れたす。県内だけでもこういう疎開わらしが、二百四、五十人か
らおるす。

あつぱ わすは早う帰らにやお父^どうにどやされるけえ――。それにはア天気もえぐねえすのう。

うちさ来るわらしを早う決めてもらわにゃア困るすよ。

だんな くじびきにすたら公平だでや。くじびきにすべえ、なア親方。

親方 んだな、そうすべえか。なアに、おらアあのわらしを引き当ててみせつからの。(笑う)

あつば わす、もう帰るす。わすかくじ弱えこたア知ってるだべ。割のえぐねえわらしならいらねえすよ。

役場 ま、ま、おがさま——。

あつば わらしはほかに貰い手があるべす。うちはどうでも欲すいというわけねえもんな。頼む頼むというけえ、人助けばすてやるべすと思うたけどはア。

親方 人助けはおらだっちゃ同じこった。使うてくれちゆうわらしは、ほかにもたんとあらア。

けど、百姓なんどもらわれてみれ、子守ばつかやらされてのう、糞まぶれんなって田ん圃さへえずりまわるだ。食わすてもらうだけでへえ、銭んこなんど一文もくれねえわさ。

あつば まっ！ えぐもそつたら口の叩けたもんだ。漁師の舟子になんど行ったらはア、朝から晩までげんこの雨が降りどおしでよ、半殺すの目さ会わされっど。おつかねえ！

だんな 二人ともええ加減にするや。こつたら面倒くせえ話なら、おれもやめるけえの。

役場 (うろうろして) 旦那も親方も、おがさまも、ともがくそのう、奥の座敷で、一口飲んでもらうべと思つて、仕度のでけた頃じゃけえ、ともがくもう一遍最終的に——。さ、どうぞ

——どうぞ——。

親方 民主主義というは、ぐうだらぐうだらすることじゃというが、なしてぐうだらぐうだらせ

にやならんのじゃろ。

だんな さあのう——。

役場 お前ら、ふんとに安田啓太つうわらしの行きさき知らねえのか。

少年たち (うなづく)——。

役場 だごさほつつき歩いてるだべア。

旦那衆とあっぱ、役場、奥へ去る。

正男 よせよう、泣くの。

勇一 ——ぼく、漁師の子供になるのなんかいやだ！(泣く)

豊 ばか。どこへ行くかまだ分ないんだ。くじびきだつてよう。

正男 ——安田君はうまくやったよな。

豊 逃げちゃったんだぜ。

正男 うん。逃げちゃったんだ。

勇一 東京へ行ったかも知れないね。

豊 行けるかよう。遠いんだぜ。

寿屋、土間へ入ってくる。うすくみぞれ雪をかぶっている。

寿屋 お前ら、まだ行がねがったのか。(雪を払う) 今年はへえ雪このくるのが早えようだわさ。

豊 おじさん。安田君は？

寿屋 ——いねがった。だごさ行つたか、皆目分らねえ。山のおぼぼのどごまで行つてみたがの

う。おばばの家は、人っ子ひとりおらんど。誰も住まっておらんじやった。

豊 どうして？

寿屋 さあのう。おおかたへえ旅にでも出たんだべさ。

豊 雪乃ちゃんも？

寿屋 雪乃？——あの女わらしか。あれもおらんじやった。啓太はへえ、神がくしに逢うたんかも知れんど。——なあ豊、正男、勇一、お前ら、役場の言う通り、おとなすぐよその家さもらわれていげや。啓太のように神がくしに逢うよりはええぞ。よっぼどええぞ。——お前らも六年生になつたんじゃ。自分の口は自分で稼げや。な！分つたべ。

少年たち（じつと黙りこんで顔をそむけている）——。

寿屋 おらどごに置いてやりてえども、おらどこのわらしというわけでねえし、仕方ねえべさ。

またええこともあるだべア。（奥へ去ろうとする）

豊 かいそんさまあ！（泣く）

正男 かいそんさまあ！（泣く）

勇一 かいそんさまあ！（泣く）

寿屋 ……………。

土間の戸をあけて、そつと中年の男が入ってくる。闇屋風の身なりに進駐軍用の半長靴をはいて胸に古びた琵琶をさげている。

第二の海尊 ごめんけえ——。どなたさまもごめんけえ。いまわすの名を呼ばって下されたで、

推参ながら門かどをばくぐり申すた。わすは九郎判官義経公のおん供をばすて、遙る遙る都から、この奥州路へ下つてまいった常陸坊海尊が成れの果てでござりす。(琵琶をうつ) さてもこのたびの合戦は、進め一億火の玉となり申すたにもかかわらず、あえなく敗け戦とは是非もなす。(琵琶) 主君義経公を初めとすて、みんなみの島々支那満洲さうち渡りたる軍勢も、武勇つたなく討死総崩れ。(琵琶) さるほどにこの海尊は、義経公を裏切り奉り、寄る辺なき女おんなこだちわらしだちを見限りて、戦場をば逃げ出し申すた卑怯者でござりす。ああ！ 濟まねえことをばすた、おりいことをばすたと、おれとわが身を悔んでおるすが、どうにもならねえのは、われとわが罪深え心のありようじゃ。(琵琶) ——わが身の罪に涙を流し、身の懺悔をばいたすために、かように村々町々をさまよい歩いて七百五十年。思えば思えば、この海尊が罪のおそろしさを、なにとぞ聞いて下されえ。

海尊、琵琶をかきならす。

曇った空から、乾いた音をたてて雪が降りこめてくる。

少年たち、寿屋、身じろぎもせず耳を傾けている。

——幕——

第三幕

(その一)

秋の晴れたひるさがり。(昭和三十六年)

岬に近い神社の奥庭。

格式のある神社とみえ、庭も蒼古の趣きがあり、奥まって神楽堂と本殿を結ぶ渡廊下がある。

遠景に白く一級燈台がみえる。

古式の神楽の奏樂が聞えている。

.....

奏樂が終ると、宮司補の秀光がくる。少し遅れて観光バス会社の小旗を持った女ガイドに引率された観光客たちがぞろぞろとやってくる。

観光客たちは東京方面からの旅行者と覚しく、勤め人の小グループや商店主らしい男づれ、主婦の仲間同士というような小集団の集まりで、みんな疲れて無感動にのろのろと動いている。一人残らず写真機をさげている。

秀光は二十四、五歳の童顔のまじめそうな青年である。

女ガイド みなさん、こちらへ——。木の根につまづかないように気をつけましょう。

秀光 ……ここは奥庭です。当社は平泉の中尊寺とほぼ同時代に建てられたものです。従って神

社建築の様式においても、仙台以北ではもつとも重要な文化財として指定されております。

——文治五年、一一九〇年頃ですが、衣川の合戦に敗れた源義経は、あの岬から蝦夷地、今
という北海道へ渡ったという伝説が残っております。——なお、御本殿と奥の院には重美に
指定された彫刻、古文書、土器などがあります。ご希望の方は御参観下さい。

女ガイド（暗誦したままを機械的に）みなさま。東京をあとにして、はや五日。ここは本州さいは
ての地でございます。明日は一路なつかしの東京へ——。みちのくの旅の最後の日を、ある
いは傷心の英雄義経を偲んで歴史を回顧し、あるいは心ゆくばかり風景を觀賞して、しみじ
みとした旅情にひたろうではありませんか。

観光客たちは聞いているのかどうかも分らないような無表情、無反応で、ぼそぼそ小声で話し合っ
たり、トランジスタ・ラジオをきいたりしている。

女ガイド それではみなさん。御本殿の方へまいります。ばらばらにならないようお願い
します。

客たち、ばらばらに秀光と女ガイドに従って去る。

巫女舞の装束をつけた雪乃、渡廊下を静かにさがってくる。それに吸いよせられるように瞳をすえ
た下男姿の啓太、庭づたいについてくる。熊手をだらりと引きずり、雪乃の足許へ寄って、じっと
見上げる。憑かれたような視線である。

雪乃 （冷たく）早う掃除ばするんじや。

啓太 ……………。

雪乃 お客さんだちが見えとる——。

啓太 なあ——。(雪乃の袴の裾に触れる)

雪乃 なんじゃ。

啓太 おらア…………。

雪乃、蠅でも打つように扇で啓太の手を打って、ゆっくりと去る。啓太、打たれた手を痴呆のよう
にみつめる。

……………

……………

巫女の少女が、伊藤豊を連れてくる。

豊は小さな旅行鞆をさげ、篤実な感じの会社員風である。

少女 あそこにおるのがそうじゃと思うすが——。下男でいう。

豊 (半信半疑で) 安田君というんですね。

少女 さあのう。苗字は何んとか知らねえすけど、啓太と呼んでおるす。

豊 そう——。

少女 きいてみたらええすねす。

豊 ええ。お世話さまでした。

少女 (笑って) 頭こ少し足りねえす。

少女、去る。

豊、二、三步近づくと、異様な感じに立ちどまってしまふ。

啓太、執拗にわが手をみつめている。突然その手を憎しみをこめてでもいるようにがぶりと噛み、呻き声をあげて去る。

豊、おどろいて見送り、急いで後を追う。

……

女ガイドに指揮されて観光客たちが、だらだらと戻ってくる。

女ガイド 次ぎは燈台岬へまいりますから、バスへ御乗車願います。——少しおいそぎ下さい。

——バスへ御乗車願います。——時間がありませんからなるべくお早く——。木の根につまづかないように気をつけましょう。——お連れのかたの顔を、おたがいによく確かめましょう。——忘れ物や落とし物がないかも一度たしかめましょう。

客たちは小声でぼそぼそ話したりしながら、だらだらと去って行く。

……

啓太、のっそりと戻ってくる。豊、そばへつくようにしてくる。

豊 まさか忘れたわけじゃないと思うけど……伊藤だよ、伊藤豊。——五年生から六年生の秋まで、学童疎開で湯の沢温泉の寿屋という宿屋で暮したじゃないか。あの時の伊藤だよ。東京にいた時はほら、君の家は表通りの洋服屋で、僕の家は丁度、君のところと背中合わせになった電気屋でさ。——しかし、僕はそんなに変わったかな、自分では分らないけど——。

啓太 ——憶えてるす。

豊 そう。忘れるわけではないものね。

啓太 あんまり思いがけねがったから——。わしに何んか用でもあるすか。

豊 いや——。別に用というわけじゃないけど——。僕は君のことをよく思い出したもんだからね。君の居所が分ったら、一度逢ってみたいと思っていたんだ。

啓太 ——そうすか。

豊 ここへかけてもかまわないかな。

啓太 かまねえす。

二人、手近かなところへ腰をおろす。啓太はまったく無表情である。豊は期待に反した思いで、やや戸惑いを感じている。

豊 それはそうだな、ずいぶんもう昔のことだもんね。——ここは、僕らのいた湯の沢とは、相当離れているんだね。

啓太 なんだす。——なして、おらの居所、分ったすか。

豊 寿屋のおやじさんから聞いたんだ。僕は会社の用事でこちらへ出張してきてね、出張なんてめったにないんだけど、待ちかまえていたんだよ、僕は。それで、ちよつと無理をして湯の沢へまわったのさ。あのおやじさん、健在だったよ。凄く喜んでくれた。

啓太 そうすか。

豊 ——僕はいま、東京で小さな会社へ勤めているんだ。

啓太 ……………。

豊 僕はあれから、農家へもらわれて行ったんだが、一年ばかりしたら、遠い親戚が僕を思い出してくれたんだろう。引きとりに来てくれてね、東京へ戻ったんだ。

啓太 そうすか。

豊 君はずっとここにいたのか。

啓太 ——ずっとではねえす。

豊 ……………。

ぼつんと話が跡切れてしまう。

……………

秀光が通りかかる。

豊、立って名刺を差出す。

豊 僕は安田君と小学生の時の友達で——。しばらく安田君と話をしたいんですが。

秀光 あ、どうぞどうぞ。かまいません。——わざわざ東京から訪ねてこられたすか。

豊 ええ。

秀光 そらア……。啓太、あっちゃの客座敷の方へお連れせんか。こんなところで失礼じゃ。

豊 いいんです。ここで結構です。

秀光 かし——。それなら、今夜はどうかお泊り下さい。客部屋はあいていますから。遠いど
ごを折角みえたのじゃし——。

豊 はあ。

秀光 啓太。そうすてあげたらええが。

啓太 へえ。

秀光 粗末な座敷すが、どうかご遠慮なく。

豊 それでは、お世話になります。

秀光 はア——。(行きかけて) 啓太は東京生まれだったすか。

豊 そうです。

秀光 ……………。(去る)

豊 泊めてもらってかまわないのか？

啓太 へえ。

豊 そういうつもりではなかったんだが……しかし、静かないところだね。ここはよほど古い
神社なんだろう？

啓太 へえ。

豊 (みまわして) 格式が高いって言うんだらうね。あとでゆっくり見せてもらおうかな。ここも
やっぱり義経伝説とゆかりでもあるの？

啓太 なんだべ。

豊 (笑って) 九郎判官義経では、奇想天外な思い出があったね。僕はあの話は不思議に忘れない
んだ。何んにも関係のない時に、たとえば会社で事務をとってる時とか、めしを食べようと
して割箸をひよっと抜き出した時とかね。誰が考え出すんだらうな、ああいう話は。

啓太 北国はへえ、冬がなげえすがら――。

豊 うん。

啓太 冬ごもりのあいだ中、炉端でへえ、いろんな話をば、次ぎ次ぎ、語るだべア。

豊 うん。

啓太 ではア、不思議なもんがいつぺえ棲みつくでがす。ひそひそ、ひそひそ、冬中しゃべってるだからの。

豊 そうかも知れないね。――あのおばあさんはどうした？ 君、知ってるんだろう？

啓太 ……………。

豊 あのおばあだよ、神降しをしてくれた。

啓太 ……寿屋できかねがったすか。

豊 いいや。

啓太 ……とうに死んだす。

豊 そうか。――安田君。君は神隠しに逢って行方が分からなくなったことになっていたが、あのおばあのところへ行っただろう？

啓太 ……んだす。けど、どっちも同じことです。

豊 同じこと――？ じゃ、やっぱり僕が思っていた通りだ。僕はあの頃から、君はおばあのところへ行っただと信じていた。僕はあのおばあさんのことも、よく思い出したものだよ。

どうしてだか、よく思い出すんだ。

啓太 ……………。

豊 お婆のところへ行つたことと、神隠しに逢つたことは、同じだというのは、どういふことなんだ？ 面白いことを言うんだね、君は。

啓 ……………。

豊 じゃ、君はあの……。 (言いかけた言葉が跡切れる)

啓太 ……………。 (ゆっくり眼をあげて豊をみる)

豊 (ふと、啓太の視線にたじろぐ) ……………。

啓太 おらア、ちよつと……。いま、何時だべか。

豊 ——三時、少しまわつたところだ。

啓太 なら、すぐ戻ってくるすがら……。わらしに乳ば飲ませねばならぬす。

豊 わらして……。

啓太 雪乃のわらしだす。

豊 雪乃……あの雪乃さんのことか！

啓太 んだ。

豊 ——じゃ、君は雪乃さんとずっと一緒だったのか。そうなのか？ あれからずっとか？

啓太 ……一緒だったす。

豊 そりや。 —— (混乱した感情を抑えて) わらしも産れたわけなんだね。そりや、よかつた。なんだか不思議なような、いや、不思議なんて、そんな言い方はなかつたな。仕合せな結果に

なつてよかつた。そうか。ほんとうによかつたね。

啓太 あとで、雪乃に会われすか。

豊 だつて、ここにいるんだらう？

啓太 ——んだ。

豊 それならむろん会いたいさ。君の奥さんを改めて紹介してくれ給え。もう僕のことば憶えていないだらうけど。

啓太 (うつろな暗い眼で豊を見る) いま、こつちさ来るす。

豊 どこに——。

啓太、のろのろと歩き出す。

雪乃、滑るような軽い歩幅で来る。

雪乃 啓太、なにをしていたんじや。わらしが乳ば欲しがつとるでないがえ。早ういがねば。

啓太 ……………。(去る)

雪乃 (婉然と笑つて) ようみえられたなす。あれは、あつけ者でござりますけえ、お庭のご案内なれば、私に言うて下さりませえ。気のつかんこととでござりすたなす。ご免をいただきます。

豊 いいえ——。

雪乃 (媚ともみえる微笑) ご本殿の方はもう御参詣なされすたか。

豊 いいえ。

雪乃 それならお詣りなされませえ。ここは羽黒山の末社でござりますが、由緒の古いお社で、

篤くご信心をばなされすたら、かならずお恵みを給わりす。さ、こちらへおいでなさりませえ。

豊 僕は――。(眩しげに視線をそらす) 安田君に会いに来たので……見物にきたのではないんですから――。

雪乃 啓太に？

豊 ええ。あなたのご主人にです。

雪乃 主人？――。(笑う)

豊 僕のご主人の旧い友達なんです。

雪乃 啓太がなにを申しましたやら。(笑う) 私は主人というものは持ちませぬ。今までもこれがらさぎも、主人を持たぬ心でござります。ひとりが好きでござりますけえの。

豊 僕は、何か思いがちをしたのかなア。安田君はあなたの――。

雪乃 あれは下男だす。

豊 下男――。

雪乃 はい。

豊 からかうのはやめて下さい！ 安田君は子供があると言いましたよ！ あなたの子供だと言いました。

雪乃 あなたはまこと剽軽なお方すな。わらしを産みましたは、私でござります。けどあれは啓太の子ではござりません。とんと早合点をなさりすたなア。(笑う)

豊 雪乃さん——。

雪乃 私を御存知——。どこぞでお目にかかりますたかなす。よう憶えがござりませんが。(笑う。瑞々しく艶色があふれる) ならあなたのお名前は？

豊 僕は……伊藤、豊。

雪乃 ふうむ(じっと見つめる)——。

豊 いいんです。思い出してくれなくてもいいんだ。僕はあなたに思い出してなんかもらいたくない。僕はそんなことのために来たんじゃないんです。

雪乃 どうなされました。おかしいお方じゃ。(低く笑う)

豊 (われにもなく感情を乱されて) そう。おかしいでしょうね、きっと。僕は知りたかったんだ、安田君が、神隠しに逢った安田君が、どうなったか知りたいと思いました。なぜそんなに知りたいのか、僕にも分らない。ただ無性に、この何年間か、僕は知りたくてならなかったんです——。それだけのことです。

雪乃 (楽しみに豊を眺める) 東京では何をしておられますか。会社のようなどごへお勤めをばなされすか。

豊 ええ、その通りです。ごたごたした、賑かといえは賑かな、多少はさっぱりと片付いてもいるけど、よくあるでしょう、そんな町に住んでいます。朝、七時四十五分に下宿を出て、駅から五十五分で会社へつきます。僕はカード室の係ですから、伝票と計算機とカードで一日暮すんです。もつとも健康体操というのを、休憩時間にやります、十二分間。

雪乃 (笑う) それがら?

豊 あとは同じですよ。もう一度五十五分電車に乗って帰るんです。駅から下宿まで約八分歩
く。菓子屋の手前を左へ曲って、五、六、七軒目。

雪乃 (笑いこぼる)

豊 いつもこんな言い方をするわけじゃないんです。(眉をよせる)

雪乃 豊さんと言われすたなす。——御本殿の方へおいでなされませえ。(そばへ近づく) ミイラ
もありますかのう。

豊 ……………。(少し身を退く) ええ、憶えています。よく憶えています。

雪乃 なら、もう一度拝まれたら、あなたさまのお望みは何んなりと叶えてもらわれす。めった
なお方にはお見せはせんのですが、あなたさまなら、お連れすてもええすなす。

豊 ……………。(ためらう)

雪乃 おそろしうなれすたか。

豊 いや——。僕は前に見たといったでしょう。もうたくさんですね。

雪乃 ミイラは二つありますがな。

豊 二つ——。

雪乃 おばばのミイラだす。なんたい 男体と女体とでござりますがのう。にょたい

豊 ……………。(息をのむ) なぜ僕に、それを見せたいんです。

雪乃 あなたは啓太に逢いにこられたのではのうて、雪乃に逢いに来られたのじゃ。違ちがうたす

か？（微笑）そうすなす。

豊 ……………

雪乃 雪乃に逢われないのじゃったら、のちほど御本殿の方へおいでなさりませえ。

豊 いっ——。いっだ！

雪乃 神楽が終了したら——。（にっと笑って渡廊下を去る）

豊、放心したように見送る。

物陰にひそんでいた秀光、耐え切れずに祈りの声をあげる。

秀光 南無！ 金剛蔵王菩薩よ！ わだくしのために、憂ぎ悩みのないところをばお説き下され

え。わだくしはそごさ参りたいと願うておるす。この現世げんぜの濁り果でたところは、耐え難う

ござりす。この汚らわしきところは、地獄と餓鬼と畜生とに充ち充ちで、不善のあつまりで

ござりす。ひとえに願うとごころは、金剛蔵王菩薩よ、わだくしに浄土をばお示し下されえ！

（転び出て地に伏す）

豊 ——どうされたというのです！ あなたはさっきの——。

秀光 ——宮司補の秀光という者だす。

豊 いったいどうしたんです。

秀光 ——も早、何を申さずともお分りの筈だ。雪乃は魔性の女おなこす。そしてわしは畜生に墮ちた

男す。

豊 宮司補さん。それでは……雪乃さんのわらしの父親というのは——。

秀光 いや、違うす。わしではありません。(衣服の乱れを直して) まこと見苦しい様をばお見せすたす。どうか忘れて下され。恥じ入りす。

豊 まったく僕は驚くほかありません。いったいここに棲んでいる人達は、どうしたというんです。

秀光 恥じ入りす。雪乃というはああした女ですが、それをばえっぐ知り抜いておって、あの女が何とすても離れるごどが出来ながったす。何んとすても……わしも啓太もでござりす。

豊 そしてあなたは、僕らの話を立聞きせずにはいられなかったのですか。

秀光 (顔をおさえ、啜り泣く) ……………。
豊 (軽蔑といらだたしさで) ……………。

御本殿の奥で奏する神樂がきこえてくる。奥深い建物の内部から伝わってくる奏樂は、低く重く心をゆすぶるようだ。

秀光 ああ——雪乃が舞うているのす。雪乃——。(呻く)

豊 (呟く) あの女の言った通りだ。僕はあの女に逢いにきたんだ。僕も神隠しに逢いたくなくなったんだ。

秀光 やめなされ——やめなされ。(身悶え)

豊 宮司補さん。あなたが啜り泣こうと、呻き声をあげようと、身悶えしようと金剛蔵王菩薩を呼ぼうと、僕はあの女に逢いに行きます。あの神樂が終り次第、僕は行きます。さあ！ あんたは自分の巢へ帰ったらいいでしょう。

秀光 なら、そうなさるがええす。(震えがとまらず)も早、とめ立ては無力とえつぐ知っておるす。わすも男じゃけえ、分らん筈はない。行きなさるがええ。雪乃の舞うとごころをあなたの眼まなこで見なさるがええ。雪乃は二体のミイラどもの前で美しく舞うておるす。あの女は本朝の交通そとおり、天竺の韋提希のごと美しい女す。けど、あの女こそは、色しき、声しやう、香かう、味み、触しょく、五欲五毒の頭首かしらでござりす。

豊 そう。おそらくね。しかしもうお話はたくさんです。

秀光 あんたもやがて、わしや啓太と朋輩同類じゃ。あんたはおばばのミイラをば、誰が作ったと思うすか。

豊 なに――。

秀光 もうお分りじやろが。

豊 (蒼ざめて) 安田、啓太ですか。

秀光 左様。

豊 ……………。

秀光 次ぎには啓太のミイラをば、わしが作らねばならなくなりす。いかに見下げ果てた男になりさがつたわしでも、そのような羽目にはなりとうないじゃ。

豊 ……………。

庭へ若い男が二人くる。防水帽と防水外套に全身黒くくめに包んでいる。まだ灯のつけてたいランタンを携える。

男1 (静かに) 秀光さ。仕度ばせんのかの。

秀光 ……いまいぐ。

男2 (静かに) 早うせねば遅れるど。

秀光 分つとる。

男1 潮の様子は上乘じゃ。今夜をばのがすたら、またあんたの気が変わるべや。

男2 もうはア二度とは待ってやらんど。

秀光 分つとるじゃ。わしの部屋さ行っていけれ。用意は出来とる。

男2 まんだ迷うておるんではねえがや。

男1 したら、おらだちもあんたを見限るど。三十分待つでや。

男2 こねばこねえでええじゃ。おらだちは出かけるけえのう。

秀光 分つとる。

男たち二人、去る。

秀光 伊藤さん。わしは今夜、あの燈台岬がら舟ば出して、沿海州さ渡るす。

豊 ええ？

秀光 あんたにだけ打明けるんじゃ。

豊 沿海州へ？

秀光 なんだ。ソ連さいぐす。もちろん密航だす。あの燈台岬がらは、もう何人も日本人が密航してるのじゃ。

豊 それは危険だ！ 見つかったらどうするんです！ なぜそんなことを……。雪乃さんのためですか。

秀光 なんだ。わしは、日本のうちにおつては、いかにおのれを厳しく責めても、いづかはきつと雪乃に逢いだくなるす。わしも神隠しに逢うた男じゃ。こうせねば呪文さ解げねえと分つたす。——伊藤さん。わしを連れていぐ今の男らも、なにかかにか、呪文さ解げねぐなつて、日本がら逃げ去る男だちだす。

豊 そう——。しかし、あの海峡は、ずいぶん浪が荒いんじゃないですか。

秀光 なんだす。風も荒いす。密航の舟は十のうち、七つがら八つまでは転覆するす。沖にはもう流氷がきてるすがら……。けど、いまが密航にはいちばんええ時なんじゃ。

豊 宮司補さん。大丈夫でしょうね。

秀光 ……源ノ九郎判官義経公も、丁度いまの時節にあの海峡さ渡つたす。(舞う)——「さても

この時、判官義経公の思えらく、破鏡ふたたび照らさず、落花また枝に帰らず、おれとわが身を苦しめて、修羅の巷ちまたに寄り来る波の、月にしらむは劍つるぎの光、潮うしおに映るは兜の星影、水や空、空行くもまた雲の波、弥猛やたげこゝろ心の梓弓あづき、身を捨ててこそ名をとどむべき」——わしは行くす。

豊 宮司補さん。御無事を祈らせて下さい。

秀光 ありがとうございます。

渡廊下へ啓太がうろうろと来る。小さな赤児を抱き、血走った眼である。豊と秀光をじっと執拗に

みつめる。

啓太 豊さ——。豊さ。あんた御本殿へは行がねえだべす。——行くだがや。

豊 行かない。絶対に行かない！

啓太 宮司補さ。あんだは？

秀光 行かんど。絶対いかんど！

啓太 ほかに誰か男のお客さんおるすか。

秀光 誰もおらん。だアレもおらんわ。

啓太 ——そうすか。そんだばええ。そんだばええ——。

秀光 伊藤さん。それでは——（黙礼して去る）

豊 ……………。

啓太、庭へ降りてくる。赤兎を寝せつけるために、ゆるくゆさぶりながら、しかし豊を監視するた
めに、ゆっくりと行ったり来たりする。低く子守唄を唄う。

〃ひとつ咲いても、桜こは桜こ

ふたつ咲いても、桜こは桜こ

みつつ咲いても、桜こは桜こ〃

……………

豊 （耐え切れなくなつて）安田君！

啓太 ……………。

豊 僕は、もう帰るからね。君に逢えたし……東京へ帰ることにするよ。

啓太 もう帰るすか。今夜ここ泊るんでねがったべか。

豊 さつきはそのつもりだったけど、考えてみるとそうしてもらえないんだ。仕事が忙しいからね。

啓太 なら……また来るすか。

豊 さあ。多分もう来られないだろう。安サラリイでは旅行なんか仲々できないからね。それに、ここは遠すぎるもんな。

啓太 ——そうすか。

豊 じゃ、君も元気でね。雪乃さんによろしく——。

啓太 豊さ！

豊 うん？

啓太 豊さ。おらア、ほんとは……。

豊 ほんとは、なんなんだ。

啓太 (涙を流す) おらア、あんたに逢えてうれしかった。思いがけねがった。

豊 うん——。

啓太 うれしかったけど、切ねがったす。

豊 もういいよ。僕だって同じさ。

啓太 豊さ、おらア、懲役にやられたんじゃ。

豊 懲役？

啓太 おらの十八の時だった。おらア、何んにも悪いこたアしねがった。おぼばが死ぬ時、おらに言うたんじゃ。おぼばが死んでも、墓の下さ埋めねえでけれど、おらに頼むんじゃ。焼いだり埋めだりしねえで、こうこう、しかじかにするって、おらに言い残したんでがす。——あんたあれをば見たがや。

豊 見ない！ 僕は見たくない！

啓太 おらア、おぼばに教えられだ通りにすただけだ。けど、裁判さかけられたんだ。おらア、懲役にいがされた。(噁り泣く)

豊 君は……。 (抑えていた怒りが発して) 僕はもう君のことなんか思い出したくない。君は、何と
いうことを君はしたんだ。醜悪だよ！ 奇怪だよ！ 吐き気がしてくるよ、僕は！ ——よ
くも君は気が狂わなかったもんだ。よくも今まで生きてこられたもんだ。

啓太 おらア、とうに気が狂うたんじゃ。狂うているがら、こうしているんでねえすか。雪乃の
そばにおって、雪乃のするままになっておるんじゃ。おらアあの女がしんぞこ憎いんじゃ。
おらの胸の中さ焔が狂いまわって、体中に釘さうちこまるようになるんでがす。

豊 僕は君に同情なんか出来ない！ 君とけたものと、どれだけの違いがあるというんだ。苦し
むがいいんだ！ 焔だの釘だのって、そんなものは君が勝手にこしらえたんじゃないか。

啓太 んだ……。 (泣く)。

豊 僕にもやつと分ってきた。おぼばが、なぜ君にそういう事をやらせたか、その理由がだ。

(怒りが恐怖に変わって) そうなんだ、お婆は死んだあとも、君に命令しているんだ。君を、お婆と雪乃の下男にしたんだ。そうなんだ！ お婆はミイラになって君の魂をさらって行ったんだ。君は魂を引き抜かれて、雪乃をあてがわれたんだ。

啓太 んだ、んだ。

豊 いっそ君なんか死んでしまいがいいんだ！ 虫けらのように踏みつぶされてしまえばいいんだ！

啓太 おらア死にてえず。死んだよりも、もっとえぐねえさまになったす。

豊 そうさ、その通りさ。しかし君には自殺なんか出来やしないよ。たまらないア！ なんだって僕は君を訪ねて来たりしたんだ。君に逢ってみたいなんて、馬鹿な気紛れを起こしたんだろう。これからさき、僕は君のことを思い出すたびに吐き気がするに違いないよ！

啓太 ……おらア、いづかきつと、あんたが訪ねてくるだべすと思っていた。一度は来るにちげえねえと思つたす。

豊 どうして。(注目する) なぜだ。

啓太 ……おらだちは、めいめい、ひとりぼっちだではア。——根こそぎ、なんもかんも、失くした仲間でねえすか。田舎で疎開わらしになったまま、おらだちは世間がら置きざりにされた迷子だベア。——普通の迷子だら、親さ呼んで泣ぐだべが、おらだちには親もねがった。

おらだちは、みんなが忘れられてしもうたんじゃ。

豊 ……………。

啓太 おらア、自分がこんなでねがったら、おらの方がら、あんたを訪ねていぎたがったす。

——あんたに逢いてがったが、恥ずがしぐて行がれねがったんじゃ。

豊 ……分ったよ、安田君。僕は君を悪い人間だなんて思わない——。

啓太 ほんとだべか？

豊 ああ。僕は君にひどいことを言ってしまった。済まない——。

啓太 ……おらア……（泣く）

豊 あの頃の仲間はどうしたかなア。正男というのは、山奥の製材所へ行つたし、勇一というのは下北の漁師にもらわれていった。

啓太 けど、豊さは仕合せになつてえがったす。

豊 そう見えるかい？ 僕はもう、七十歳の老人のような気がするんだ。疲れたよ、僕は。

啓太 （突然、低く、ああ！ と声をあげ不安の表情に変わって立ちあがる）早う——。

豊 どうしたんだ！

啓太 早う帰つてけれ。（おろおろと）豊さ。おらに約束してけれ。雪乃に逢わねえと約束してけれ。おらの頼みだはア！

渡廊下を滑るように雪乃くる。

瞋いかりと侮蔑いかりに燃えるような視線で豊と啓太を眺める。

豊 （声をあげんばかりにみつめる）……………。

啓太 雪乃——。（哀願）雪乃——。

雪乃 啓太。わらしをこっちゃへよこすのじゃ。——お前には抱かせてやらんのじゃ。

啓太 雪乃——。

雪乃 早う！

啓太 (おずおずと赤児を渡す)

雪乃 ——お前が豊さんを邪魔だてしたことはえつぐ分つたど。啓太の腐れ者！

啓太 ゆるしてけえ。ゆるしてけえ。おらアそんだばこたアしねがった。

雪乃 啓太は犬のようじゃなア。下男の役もお前にはつとまらん。豊さん。早う帰りなさるがええす。あんたのような臆病なお人は、雪乃もきらいじゃ。もう二度とここへは来なさらぬがええすなす。

豊 僕も、(声がひきつる)僕もあなたのような人は……あなたは、五欲五毒の頭首^{かしら}だ。僕はあなたの下男には、ならない。なりたくない。

雪乃 (笑う)早う帰られて、雪乃を思い出されたらええすねす。そして雪乃を罵られたらええのじゃ。なして雪乃に逢おうとなされすたか、えつぐお分りになるべっしや。(赤児をゆすりながら)ひとつ咲いても、桜こは桜こ——ふたつ咲いても、桜こは桜こ——。

豊、魅入られ、われを忘れ、渡廊下の雪乃の足許へ手を差し伸ばす。雪乃、その手を踏む。交互に踏みつけながら唄う。

雪乃 みつつ咲いても、桜こは桜こ——(低く笑う)——よつつ咲いても、桜こは桜こ——。

豊 (虚脱したように雪乃を見あげている)

雪乃（笑う）いつつ咲いても、桜こは桜こ……。ななつ咲いても……。

啓太、突然地面に身を投げ出す。

啓太 かいそんさまあ！ かいそんさまあ！ かいそんさまあ！

啓太、胸をかきむしり、地面を転がりまわりながら、なお海尊の名を呼ぶ。

豊、激しく衝撃をうけて啓太をみつめる。

……

雪乃、二人の男の姿を快げに眺めながら、嬌慢に無邪気に笑いつづける。

（暗転）

（その二）

同じ庭、わずかな時が経過して、落日が夕暮れに移っている。

啓太ひとり、悶絶して息たえたごとく倒れている。

燈台の光が回転する。

……

遠くから近づいてくる琵琶の音と共に、海尊の声が聞える。

“……下野の左馬頭義朝が末の子、九郎義経とて、わが朝にならびなき、名將軍にて、おわしけり”

啓太、よろめき起きる。

初老の男がゆっくりと歩いてくる。着古した背広に半白の髪は無帽。停年退職者の如き風態、琵琶

を抱くさまに両手を胸のあたりに挙げてゐる。

第三の海尊　これは都より遙る遙る下つてまいつた、常陸坊海尊が成れの果てでござります。さても久しう都に棲み古りて七百五十年。(琵琶をうつ) 風塵の巷ちまたの生計たつきに討ち敗れ、身にこうむりし深傷ふかであきで浅傷、あえなくも戦場に取り残され、味方を呼べども答こたへはなく、潮をなして遠去かる。(琵琶) 義経公を裏切り奉つたわが身の罪の報いはかくぞと、今こそ思い知られて候。またもさ迷い下りし道の奥おくの、情なさけある心をば尋ね申さん。(琵琶)

啓太、海尊の前に這いよる。

第三の海尊　おお。なにごとかの。

啓太　海尊さま。どうかおらをあなたのお弟子にしてけえされ。おらア罪深え男でござります。あなたのお供をばさせてけえされ。おらア哀れな虫けらでござります。(泣く)

第三の海尊　いだわすいお人じゃ。けど海尊は文治の昔がら、弟子を持たず、同行はせぬが定法でござります。

啓太　どうすたらええべす。おらの助かる道をば教えてけえされ。おらア生きながら死に腐れていぐ男す。お慈悲じゃ。海尊さまのほが、おらの頼むお方はねえのじゃ。

第三の海尊 (つくづくと見て) あんた、もすかすたら、わしとおなじく、海尊法師でねえだべか——? どうもそうらしいでや。さ! とものがぐも、すつくと立つてみなせえ。

啓太 (もがき這いまわつて) おらア、おらア、立てねえす。地面がおらを吸いこんでいぐ。おらを引っぱりこむじゃ。助けてけえされえ——。

第三の海尊 ふむ。わしもあんだのようであった。まこと見苦すいのう。なして恐すいのじゃ。

あんだよりもつみとが罪科の深けえ悪人もけしやう化生も、この世にはおらんでねえすか！ それ！（琵琶を強く弾く）

啓太 （よろよろと立つ）――。

第三の海尊 おお！ わしの思うた通りじゃった。あんだの胸さ、琵琶があるす！（うやうやし

く一礼する）――さ、弾いてみなされ。あんだの音色をば聞こう。

啓太 だごに？ ――だごに？

第三の海尊 まこと、青道心というは世話さやけるもんだす。こうするだっちゃ。ほれ、打つてみなさるがええす。

啓太 （両手を胸のあたりに挙げてうつつ。琵琶が鳴りひびく）ああっ！ 鳴ったす！ 鳴ったす！（かき鳴らす）

第三の海尊 んだ……んだ……ええ音色じゃ。まことええ音色じゃのう。

啓太 ああ！（悲しみ）おらが海尊とはのう、知らねがったす。おらのような者の懺悔を、いずこの誰が聞いてくれるだべか。だごさ向いて行ったらええべ。

第三の海尊 あんたを待つておる人はたあんとおるじゃ。残りのう、罪をつぐのう心をば失いなさるなよ。なら、あんたは南の方さ行ぐがええす。わしは北の方さ旅にいごう。――海尊どの。あんじましく息災堅固でのう。

啓太 へえ。あんたも息災堅固で――。

兩者、うやうやしく礼を交わし、背中合わせに方向を定め、琵琶をうちながら静かに歩き出す。

第三の海尊（声を合わせて）世の人々よ、この海尊の罪に比ぶれば、みなみなさまはまこと清い

第四の海尊 清い心をば持つておるす。わしは罪人のみせしめに、わが身つみとがにこの世の罪科つみとがをば、

残らず身に負うて辱かしめを受け申さん。わが身の罪に涙を流し、身の懺悔をばいたすために、かようにさすらい歩いて七百五十年。（琵琶）思えば思えば、この海尊が罪のおそろしさを、なにとぞ聞いて下されえ。

二人の海尊、去る。琵琶の音、なお聞えつつ遠去かる。

回転する燈台の光。

— 幕 —